

ヴァンパイア文学とアメリカ大衆文化

——Whitley Strieber が創造した Miriam Blaylock についての 考察を中心として——

尾 上 典 子

まえがき

- I 人間に不老不死の生命を授けようとしたヴァンパイア Miriam Blaylock
 - II 種の存続のために闘い、人間の愛を信じようとしたヴァンパイア Miriam Blaylock
- 結び

まえがき

今日ヴァンパイアを主題とした大衆芸術作品—小説、映画、演劇、ミュージカル—は欧米のみならず我が国にも数多く存在しており、枚挙に暇がないほどであるが、その中で最も人口に膾炙かいしやされているものがアイルランドの作家 Bram Stoker (1847~1912) 作 *Dracula* (『ドラキュラ』, 1897) であることは否めない事実である。しかし、この作品がイギリスの作家 John William Polidori の短編小説 “The Vampyre” (1819)、イギリスの作家 James Malcolm Rymer と Thomas Peckett Prest によって書かれた長編小説 *Varney the Vampyre* (『吸血鬼ヴァーニー』, 1845~1847)、作者不詳の短編小説 “The Mysterious Stranger” (1860)、そして Stoker と同じくアイルランドの作家である Joseph Sheridan Le Fanu (1814~1873) によって書かれた *Carmilla* (『カーミラ』, 1871~1872) から多大な影響を受けたことは明白である。更に Stoker は、15世紀ルーマニアのワラキア大公 Vlad 3世 (俗称 Vlad Dracula. [1431~1476] オスマントルコの侵略を防ぎ、中央集権国家を成立させた知略に富んだ君主であったが苛烈な性格で、トルコ兵2万人を串刺し刑に処し、父や兄の殺害に手を貸したワラキア貴族や謀反の嫌疑がある者を容赦なく処刑し

たため、彼を貶めようとする人々によって残虐で血を好む変質者の汚名を着せられたが、今日のルーマニアでは国家的英雄として称賛されている)¹⁾にまつわる禍々しく扇情的な伝説を取り入れ、実在の歴史上の人物の名誉を著しく毀損することによって吸血鬼小説を完成させた。Stoker が描いた Dracula は極悪非道の怪物であり、作中で博学な科学者にして哲学者の Van Helsing 博士が定義しているように、神を汚す化け物、人類のために滅ぼすべき悪魔²⁾である。だが注意深く *Dracula* を読めば、Dracula 伯爵に襲われて Lucy が血液を失うたびに、Van Helsing 博士の指示により、婚約者や男性の友人そして博士自身から輸血を受けた Lucy が最終的に死亡した直接の原因は、彼女と献血者たちの血液型が合致しなかったためであると推察されるので、患者を死に至らしめた輸血事故を引き起こした独善的で浅薄な Helsing の責任は極めて重いと云わねばならない。また、ドキュメンタリー形式を用いる方が信憑性に富むと Stoker が意図したためか、様々な人物の日記や手紙、電報の電文や新聞記事などで物語が進められるが、これらの殆どは Dracula を天敵とみなす人々が記録したものである。物語の中では主要な登場人物全員がいかにして極悪非道で憎むべき怪物を滅ぼすべきか策を練り、Victoria 朝の勧善懲悪の精神風土の中で絶賛された小説にふさわしく、遂に Dracula は胸を刺され、粉々の塵となって崩れ去る。埋葬後に不死者として蘇り、子供たちの血を吸うようになった Lucy は婚約者によって胸に杭を打ち込まれた後に首を切り落とされ、口の中にニンニクを詰め込まれて埋葬される。Dracula 伯爵と同棲していた三人の吸血鬼の貴婦人たちも Helsing によって胸に杭を打ち込まれ、首を切り落とされるが、Helsing 自身は、この解体作業を屠殺者の仕事と自らに言い聞かせている³⁾。そして Dracula に血を吸われ、Dracula の血を与えられた Mina Harker は魂を汚された己の不幸を嘆き、彼女自身が完全に吸血鬼に変身した場合には自分を殺してほしいと夫や友人たちに懇願する⁴⁾。要するに Bram Stoker の大ヒット作によって、Dracula とは、その毒牙によって人間を餌食とし、更に自らの仲間を増やそうと企てる人類の敵であり、十字架とニンニクによって撃退される夜行性の吸血鬼であるという定説が確立されたことは否定できない。

Stoker のつくり上げた Dracula は、ギリシャ・ローマ神話以来ヴァンパイアを恐ろしくも美しい神秘的でロマンティックな生きものとみなしてきた文学上の一つの伝統から外れた醜悪な怪物であったが、映画化されてスクリーンに登場した Dracula 伯爵は時代とともに優雅で気品に溢れ、特に女性を魅了する美しい貴公子に変身して行った。風格ある演技で知られる Bela Lugosi が Dracula 伯爵役の名優であった⁵⁾ ことは伝説となっており、舞台俳優としても名高い Frank Langella が *Dracula* (監督 John Badham, 1979) の中で人間性豊かで永遠の愛を求める極めて魅惑的なヴァンパイア貴族を演じ⁶⁾、Gary Oldman が *Bram Stoker's Dracula* (監督 Francis Ford Coppola, 1992. タイトルとは正反対に、この映画は Stoker の意図を完全に覆し、Mina は Dracula に深い愛を捧げる) の中で、前世には自分の妻であった Mina との悲劇的な恋に苦悩する伯爵を演じ⁷⁾、遂に *Dracula Untold* (監督 Gary Shore, 2014) では、Luke Evans がオスマントルコ軍から国と家族を救うために一身を捧げ、血の杯を飲んでヴァンパイアとなった悲劇的英雄 Vlad 3 世の姿を好演している⁸⁾。このように Bram Stoker の小説によって怪物の烙印を押され、限り無く傷つけられてきた Vlad 3 世の名誉は、ようやく 21 世紀に挽回されたと言えよう。

ヴァンパイアを主人公とした映画で近年一世を風靡したものは Stephenie Meyer 原作の *Twilight* シリーズに基づく *Twilight* (2005), *New Moon* (2006), *Eclipse* (2007), *Breaking Dawn* (2008) である⁹⁾。更にアメリカでは連続テレビ映画シリーズ *The Vampire Diaries* (原作 L. J. Smith) が 6 年以上にわたり大好評を博し続け、今日 (2016 年 3 月現在) に至っている¹⁰⁾。

ヴァンパイアを主題とした現代文学の最高傑作がアメリカの女流作家 Anne Rice (1941~) の *The Vampire Chronicles* シリーズ (1976~) である¹¹⁾ ことに異議を唱える者はいないであろうし、Bram Stoker とは正反対に完全にヴァンパイアの視点から描かれたこのシリーズの第 1 作 *Interview with the Vampire* (1976) が 1994 年に映画化 (監督 Neil Jordan) され、Tom Cruise, Brad Pitt という二大美男俳優が主演したために空前の大ヒット作となったのは周知の事実である¹²⁾。Anne Rice が創造した美しく、繊細で、官能的なヴァ

ンパイアたちの生命力は、余りにも不確実な現代社会に生きる我々に不思議な魂の安らぎをもたらしてくれるように思われる。Bram Stoker の *Dracula* がいかに版を重ねようとも、いわゆるサブカルチャーの範疇に属する異端的な存在としかみなされていなかったヴァンパイアを大衆文化の表舞台に踊り出させたことにおいて、Anne Rice の功績は極めて大きい。しかし現代世界文学史上、最も美しいヴァンパイアと言え、アメリカの作家 Whitley Strieber (1945~) が著した *The Hunger* (1981) と *The Last Vampire* (2001) の主人公 Miriam Blaylock であろう。Strieber の原作に基づいて映画化された *The Hunger* (1983, 監督 Tony Scott) は類い稀な美貌の Catherine Deneuve を Miriam 役に配し、相手役を演じたのは美男の誉れ高い David Bowie であり、耽美と恐怖の世界を格調高く描き出した芸術的価値の高い作品であった¹³⁾。Anne Rice の創りあげたヴァンパイア像を更に進化させ、危険ではあるが優雅で、知的で、孤独の影を引きずる、この上なく美しい生きものとして描き出した Whitley Strieber の *The Hunger* の登場によって、ヴァンパイア文学は遂に現代アメリカ大衆芸術の表看板の一つとなるに至ったと述べても過言ではないと思われる。そこで本稿では Strieber が生み出した Miriam Blaylock について考察することを通して「愛」、「死」、そして「永生」について論じたい。

【注】

- 1) Nicolae Stoicescu, *Vlad Țepeș : Prince of Walachia* (translated from the Romanian by Cristina Krikorian, Bucharest: Bibliotheca Historica Romaniae Monographs XXI, Eritura Academiei Republicii Socialiste România, 1978).
- 2) Bram Stoker, *Dracula* (New York: Palgrave, 2002), p. 291., p. 316.
- 3) *Ibid.*, p. 362
- 4) *Ibid.*, p. 326.
- 5) J. Gordon Melton, *The Vampire Book : The Encyclopedia of the Undead* (Detroit: Visible Ink Press, 1999), pp. 433-437.; Matthew Bunson, *The Vampire Encyclopedia* (New York: Crown Trade Paperbacks, 1993), p. 165.; William Patrick Day, *Vampire Legends in Contemporary American Culture* (Lexington: The University Press of Kentucky, 2002), pp. 18-20.
- 6) J. Gordon Melton, *op. cit.*, pp. 405-407.; Matthew Bunson, *op. cit.*, p. 75.; William Patrick Day, *op. cit.*, p. 65.

- 7) J. Gordon Melton, *op. cit.*, pp.64-67., p. 501.; Matthew Bunson, *op. cit.*, p. 32-33.; William Patrick Day, *op. cit.*, pp. 74-80.
- 8) Luke Evans talks Dracula Untold in Romania-YouTube <https://www.youtube.com/watch?v=4cFLYrOk9z0>
- 9) Aubrey Sherman, *Vampires : The Myths, Legends, and Lore* (Avon: Adams Media, 2014), pp.104-105.; Bridget Heos, *Vampires in Literature* (New York: Rosen Central, 2012), pp. 39-41.
- 10) Bridget Heos, *op. cit.*, pp.36-37.; Season Seven-The Vampire Diaries Wiki-Wikia http://vampirediaries.wikia.com/wiki/Season_Seven
- 11) S. T. Joshi (ed.), *Encyclopedia of the Vampire : The Living Dead in Myth, Legend, and Popular Culture* (Santa Barbara: Greenwood, 2011), pp.166-169.; Matthew Bunson, *op. cit.*, p. 134.; William Patrick Day, *op. cit.*, pp. 43-46.
- 12) J. Gordon Melton, *op. cit.*, pp. 368-370.,
- 13) William Patrick Day, *op. cit.*, pp.92-93.; S. T. Joshi (ed.), *op. cit.*, p. 162.; Matthew Bunson, *op. cit.*, p. 128.

I 人間に不老不死の生命を授けようとしたヴァンパイア

Miriam Blaylock

UFO 研究者としても名高い Strieber が創造したヴァンパイア神話は極めて独創的なものである。すなわち自然界の食物連鎖において最高の地位を占めていると一般に信じられている人類よりも遙かに優秀な生物が太古の昔から存在しており、彼らは自分たちが猿から進化させた人間を飼育・管理する Keeper (飼い主) であり、品種改良を重ねるとともに人間の血液を食糧としてきたという説を彼は展開する¹⁾。そして彼は Keeper たちが、実は宇宙のどこかの星から地球を訪れた異星人だったのだ²⁾と主張している。不死に近い長寿を維持することができる Keeper 一族は世界の正義と意義に欠くことのできない絶対的な存在で、地球上に生息する全ての生き物を創造したのは Keeper たちであり³⁾、彼らは人類を単なる食料用の家畜の地位には留めず、英知を授けて導いたが、異常に人類が繁殖し、特に近年、人類がテクノロジーを画期的に発展させた結果、誇り高い君主の座を奪われて凋落の一途を辿り、ふだんは闇の中で生活し、食糧を得る必要に迫られたときだけ人間社会に姿を現わし、vampire

(ヴァンパイア) という名称で呼ばれるようになったのだ⁴⁾と彼は説いている。ヴァンパイアを、このような卓越した存在として定義づけた最初の作家が Strieber であることは言うまでもない⁵⁾。全世界に存在していたかつての統治者の数が次第に減り、低い出生率のために子孫を残せない状態に陥ったとき、人間を自分たちよりも劣った動物とみなすのではなく、人間の知性に敬意を表し、感受性豊かな人間を愛し、自らもテクノロジーを自在に駆使して、富も名声も獲得した絶世の美女の Keeper が Miriam Blaylock である。彼女は古代エジプトに生まれ、人類の歴史を見つめながら三千年の生涯を送った⁶⁾後、21世紀初頭に CIA の特別捜査官 Paul Ward—彼は Keeper と人間との交配により誕生した者の子孫でありながら、ヴァンパイア掃討作戦に携わっている—によって生命を奪われることとなる⁷⁾。しかし Miriam は、ヴァンパイアの血を引きながらも完全に人間社会に同化できる身体機能を備えた自分の息子を、Paul との間に誕生させるという奇跡的試みに成功したために、世界の統治者 Keeper としての自分の存在意義を確立することができた心の安らぎを得て、死を受け容れたのであった。

Strieber のヴァンパイア小説が相当過激な性描写と暴力場面を特徴としている点は否めないが、猥雑な印象を読者に与えることは殆ど無く、Victoria 朝の偽善的道義観念にどっぷりと浸^{つか}かった Bram Stoker 作 *Dracula* の陰湿な禍々^{まがまが}しさは見当たらない。そもそも *The Hunger* の中で Strieber が主人公 Miriam をヴァンパイアという言葉で一度も呼んでいないのは、Stoker の *Dracula* によって定着された余りにも邪悪な怪物—陽光を恐れ、夜明けとともに棺の中で眠り、十字架とニンニクを忌避し、鋭い牙で人間の肌につけた傷口から生血を^{すす}吸^することで生きながら得る幽鬼—とは全く異なる、別個の種としてのヴァンパイア像を創造したかったからであろう。彼の描いた Miriam は、ある意味において、限り無く神に近い存在であり、あらゆる人間に対する生殺与奪の権利を掌握しているが、自分の飢餓を満たす以外の目的で人を殺すことは極力避け、長い歳月の孤独を癒すための最愛のパートナーとして選んだ人間の男性あるいは女性に自らの不老不死の血液を与えることによって、彼らに数百年から千年

間の若さを保つことを可能にさせる⁸⁾。 *The Hunger* の本文の前に記された Alfred Tennyson の *Tithonus*^{ティートノス} (1833) と John Keats の *Lamia*^{レイミア} (1819) からの引用句を読めば、Strieber がギリシャ神話に匹敵する格調高い悲劇的幻想小説を生み出すことを望んだのは明らかである。 Tithonus はギリシャ神話に登場する人物で、暁の女神 Eos^{エーオース} (ローマ神話の Aurora^{オーロラ}) の夫であり、Eos は Zeus^{ゼウス} に頼んで、この人間の夫を不死にしてもらったが、不老にてもらうのを忘れたために、著しく老衰して、声だけの存在と化したとされる。一方 Tennyson の詩では Tithonus 自身が暁の女神に対して不死の命を与えてくれるよう頼んだと述べられている⁹⁾。

人はこの世に至り、野を耕し、やがて地の下に眠る
 幾歳月の後に、長寿の象徴である白鳥も死に絶える。
 だが残酷なる不死の生命は
 我を憔悴させるのみ...¹⁰⁾

Strieber が引用したのは僅か 4 行だけであるが、この詩の後の部分を補足すれば、*The Hunger* において Miriam の人間の夫 John Blaylock がヴァンパイアへの変身から 180 年後に急速に老いさらばえて激しい苦悩に襲われたときの心理そのものを読み取ることができる。「ああ悲しいかな！ この老躯、かつては一人の男であったのに一輝かしき美しさゆえに光栄にも、あなたの婿に選ばれ、慢心して、自らを神の一人と見なすほどであった！ 私は『不死の命を与えたまえ』とあなたに願い、あなたは微笑んで、私の願いをかなえて下さった。しかし強力な時の女神たちは憤り、私を殺すことはできなかったが、私を不具の身にした。そして永遠に若いあなたとともに私を住まわせ、永遠の青春のそばにある不死の老人として、私の全てを死灰の中に投げ込んだ...私を解放し、不死の命という贈り物を引き取って下さい。どのような形であれ、人は本来の姿から変わったり、運命によって定められた生命を越えて生きようと何故望むのだろうか？ その寿命こそ全ての人々にとって最も相応しいものなの

に。」¹¹⁾

次に Strieber が Keats の *Lamia* からの詩句を引用した理由は、^{ヘルメス} Hermes の魔力によって蛇体という牢獄から解放たれて本来の美しい女性の姿に戻ることができた Lamia が、彼女の愛する ^{コリント} Corinth の若き哲学者 ^{リシウス} Lycius との婚礼の宴の席で Lycius の師 ^{アポロニウス} Apollonius によって邪悪な蛇と糾弾され、Lycius の愛と信頼を失った彼女は姿を消し、悲嘆の余り Lycius の命は絶える、という悲劇的な物語詩のテーマが、彼のヴァンパイア小説の主題と共通したものであると強調したかったからであろう。Strieber は Keats の *Lamia* から次の 3 行しか引用していない。

かつて天空に荘厳な虹が架かっていた。
 だが我々はその横糸とその織地を知ると
 その虹は平凡な物事の味気ない目録に入れられる¹²⁾。

しかし、引用部分の前後の「あらゆる魅力は冷たい学問のただひと触れで消え去るではないか？ 学問は天使の翼を挟み取り...あらゆる神秘を征服し...虹をも織りほぐすであろう。その昔、それが優しい現身のレイミアを影と溶かしたように」¹³⁾ という箇所を補えば、魔性の蛇という呪われた宿命を担いながらも崇高で純潔な恋を貫こうとした Lamia と *The Hunger* の主人公 Miriam の悲劇性の共通点を我々は認めることができる。そして Miriam の愛情深く聡明な母親の名が Lamia であったことが明らかにされており、Strieber はギリシャ神話に登場する幼児たちを食らう狂った蛇女の伝説とは完全に異なる物語を展開する。

なお *The Hunger* と *The Last Vampire* の出版の間には 20 年の歳月があり、前者と後者の記述の間に幾つかの食い違いが認められるが、後者の方が Strieber が真に意図したものであろうと仮定して、彼のヴァンパイア小説の分析を進めたい。

Miriam の一族は古代エジプト文明を創造し、彼女の父はエジプトのファラ

オであったこともあった¹⁴。彼は美しく教養豊かでユーモアのセンスもある妻 Lamia を深く愛していたが、Lamia は 1761 年に^{ドレスデン}Dresden に近い村で魔女として人間たちに焼き殺された。Keeper の一族は体内の血液の流れが完全に止まるまで死に至ることはないので、彼女が炎の中で極めて長時間にわたり苦しみながら死んで行く有様を人間たちは嘲笑していた¹⁵、と記されている。Strieber は、生きるために人間の血を必要とするヴァンパイアと比較して、人間という動物がいかに残忍かつ非情な方法で、かつては自分たちの保護者であった Keeper を抹殺して行ったかについて詳述しており、我々は、彼がヴァンパイアの視点から人間の暴虐や破廉恥な言動を克明に描写している点に注目すべきである。Strieber は処女作 *The Wolfen* においても極めて知的な狼人間たちについての優れた心理分析を行なっているが、あくまでも主人公は優秀な二人の刑事 Becky Neff と George Wilson である¹⁶。これに対して *The Hunger* と *The Last Vampire* に登場する Keeper (ヴァンパイア) たちは、もともと人間を超越した美しく神秘的な存在として描かれているので、彼らを滅ぼそうとする人間たちに対して、読者は激しい怒りを覚えるほどである。Miriam の父は妻を失った傷心から立ち直ることができず、死を求めるようになり、1937 年に飛行船^{ヒンデンブルク}Hindenburg 号の爆発事故で死亡したが、落命する前に、炎の中から沢山の人間を救出した高潔な Keeper であった¹⁷。Miriam の夫が死亡したのは古代ローマ時代であると類推されるが、彼は、妻が赤ん坊を死産した衝撃に打ちのめされ、悲嘆と絶望の余り、完全に食を断って自ら餓死したのだった¹⁸。人類が地球の支配者として繁栄して行ったのとは正反対に、Keeper たちは低い出生率のために子孫を残せず、徐々にその数を減らし、人間に駆逐されて、闇の世界に追いやられるようになった。衰亡の一途を辿りながらも、かつての栄光に執着し、あくまでも人間を自分たちよりも劣った一種の家畜として蔑視し続けている他の Keeper たちとは著しく異なり、人間を自分の友や恋人と認める Miriam は、夫の死後、耐え難い孤独を癒し、愛情を捧げる対象を見つけるために、人間の男性か女性をパートナーとする生き方を選択する。

Miriam が「不死の生命を与える」と約束して自分の血液を相手の血管に注

ぎ込むことによって、人間は非常に長い歳月の間、若さと美貌を保って生き続けることが可能となる。しかし、その代償として Miriam と同じように人間の血を糧とする生きものとなった以上、飢餓を満たすために、自らの人間性と相反する感情に引き裂かれて苦悩する宿命を背負わねばならない¹⁹⁾。そして生まれつきのヴァンパイアではないために、変身から数百年後か千年後の或る日突然、急速な老化現象に襲われ、恐ろしい飢餓感にさいなまれながら死ぬこともできず、意識を保ちながら徐々に朽ちて行く²⁰⁾。このように Miriam から永遠の生命を与えられたと信じていたのに実は彼女からの贈り物には恐ろしい呪いが秘められていたことに驚愕する人間たちは、暁の女神 Eos の夫として不死の命を得ながらも永遠の若さを保つことができずに老いさらばえて最後には小さな蟬となって妻の虫籠かごに入れられた Tithonus と全く同じであり、Strieber がギリシャ神話の悲劇を現代のヴァンパイア文学に取り入れた手法は格調高く、極めて独創的である。

Miriam のパートナーとして特筆すべき最初の人物は、古代ギリシャ人の奴隷 Eumenes である。アテネの学者の三男であった彼は、豊かな知性と強靱な意志に加えて並外れた体力に恵まれた美青年だったが、アテネがローマに征服された後、父親の蔵書を奪い返すために奴隷として売られた²¹⁾。その後、彼は紀元前 71 年に奴隷剣士 スバルタクス Spartacus とともにローマ帝国に叛乱を起こしたが捕らえられて磔刑に処せられ、アッピア街道に晒されながら刑台の上で三日間、生き延びる努力をし続けていた²²⁾。何マイルにも及ぶ十字形の磔台の列は腐臭を放ち、あたりが暗くなるほど蠅が群がっていたが、Miriam は自ら二輪馬車を駆り、エジプト人の奴隷たちを引き連れて、このおぞましい処刑の犠牲者たちを調べていた。そして知力と体力の全てを尽くして十字架の上で生きるための闘いを行なっている Eumenes こそ、自分が求めている世界最強の男と確信した彼女は、彼を十字架から下ろし、ローマの屋敷へ連れ帰った²³⁾、と述べられている。Miriam の勇猛果敢さと行動力がどんな女性をも凌ぐものであったことに異を唱える読者はいないであろう。更に彼女のこの行為が、不思議にもキリスト降架の情景を思い起こさせることも否めない。医学についての専門的

知識をエジプトで習得していた Miriam は、医師たちを助手として、Eumenes の健康回復のために献身的な努力を行ない、完治するとバビロニアの王子のように美しい衣装に身を包ませ、彼を深く愛するようになった²⁴⁾。Eumenes の血管に Miriam の血を注ぎ込むのは、彼にとって困難な試練であり、過去に彼女はその試みに失敗して、何人も人間の恋人を失ってきたのだが、幸い彼は転生に成功し、Miriam と Eumenes は約 500 年間、幸福な愛の生活を送ることができた²⁵⁾。生粋のヴァンパイアである Miriam が、Bram Stoker の *Dracula* に登場する医学博士 Van Helsing とは比較にならぬほど優れた臨床医学の知識を持つ存在として描かれている点は注目に値する。だが転生から約 500 年後の 5 世紀に、ヴァンダル人がローマへの侵略を始めた時期に Eumenes の肉体は急速に衰弱し、生命の糧である人間の血液を消化することさえ不可能となっていた。この頃 Miriam はビザンチンとギリシャ混血の娘で織工として働いていた美しい娘 Lollia を新しいパートナーとしていた。かつての勇姿の面影すらなく、生ける屍と化しながらも生命を保っている Eumenes の体を棺に納めた Miriam は決して彼を見捨てずに、その棺を馬車に積み込み、Lollia とともにイタリアを去り、コンスタンティノーブルに向かった²⁶⁾。そしてビザンチン帝国が衰退しつつあった時期に Miriam は London に居を移した。だが、若さも美しさも失い醜悪な容貌と化し、凄まじい飢餓感に苦しんで人間を次々に襲うようになった Lollia は 1430 年に魔女として告発され、油で煮られる極刑に処せられた。しかし Miriam は、その遺骸を処分しようとしていた役人に銀貨を支払って Lollia を取り戻し、残虐な刑罰を受けた後とはいえ生命の反応が感じられる彼女の体を棺に納め、Eumenes の棺とともに船に積み込ませた²⁷⁾。Miriam は自分の愛する人間に不死の生命を与えると約束して自らの血を与えてヴァンパイアに転生させてきたが、最終的には Eumenes の場合も Lollia の場合も、彼らを欺く結果となってしまった。しかし彼らがいかに醜悪な姿になり果てようとも、永遠に彼らを見捨てることなく守り続けるという自らへの誓いを Miriam が破らなかつたことを我々は決して忘れてはならないだろう。

Miriam がパートナーとしての Lollia を失った後の数百年間の出来事について

て Strieber はふれていないが、彼女は、18世紀にイギリスの North Yorkshire に住む貴族 Hadley 卿の息子 John Blaylock を魅了した。妻を亡くしている John の父は時折、貧乏貴族の女性を自分の館に招くことがあったので、John は、当初 Miriam もその種の高級娼婦の類いに属すると思いきみ、初対面のときに父の前にいることなど忘れて、彼女の雪花石膏のような白いうなじに思わず接吻してしまった²⁸⁾。そのとき彼女の眼に宿った豹のような鋭い視線は、John を慄然とさせたとあるが、捕食動物としての Miriam の本能と、世慣れていない人間の若者に対する侮蔑の念²⁹⁾をあらわにしたものであろう。父が就寝した後に Miriam の寝室を訪れた John の心に、彼女は魔女ではないかという不安が一瞬よぎったものの、所詮、彼女の完璧な美貌の魅力には抗し切れなかった。一方 Miriam は John に対して「あなたは愛のことなど何も知らない」³⁰⁾と激しい口調で語る。この場面は Bram Stoker の *Dracula* の中で Dracula 伯爵と共に住んでいるヴァンパイアの貴婦人が彼に投げつけた言葉³¹⁾を思い起こさせるものであるが、Strieber は Stoker とは対照的に、生来のヴァンパイアである Keeperこそ人間を超越した豊かな感受性の持ち主で、愛の歓喜も懊悩も知り尽くした存在であると主張したかったのだと推測される。

Miriam は彼女の人間の夫 John とともに彼の領地の人々の血を求めたために、超自然的な現象に敏感なジブシーたちは恐れおののき、農民たちも逃げ去り、John の父は自殺してしまった³²⁾。そして Miriam と John は North Yorkshire を去って London の社交界で過ごした後アメリカへ移住した。

Blaylock 夫妻は今や現代アメリカの New York の高級住宅地 Sutton Place の瀟洒な屋敷に住んでいる。それは白い大理石の縁取りがある赤煉瓦造りの可愛らしい館で、窓はフラワーボックスで飾られている³³⁾。しかし地下には特別仕様のボイラー室があり、Miriam と John が餌食にした人間の死体(残骸)を完全に焼却することができる。彼らは多くても週に一度人間を襲うだけで充分であるが、犯罪調査が綿密に行なわれる現代都市において餌食の対象とするのは、行方不明になったとしても怪しまれないような人々や、浮浪者・売春婦のような社会の最下層に位置する人々が殆どで³⁴⁾、Anne Rice の *The Vampire*

Chronicles に登場する賢明なヴァンパイアたちも餌食の対象を非常に慎重に選んでいたことが思い出される³⁵⁾。Miriam と John は、ハイスクールから退学処分を受け、コカイン所持の罪で数日後には裁判所に出廷せねばならない不良少年と不良少女が一緒に家出したように見せかけて彼らを襲う企てに成功して飢えを満たし³⁶⁾、死体の残骸を黒いビニール袋に入れて車で持ち帰る。だが帰路に John がうたたねしている姿を見て、Miriam は、轉身から 200 年も経過していないのに彼が突然の老化現象に襲われている兆候を認めて慄然とする³⁷⁾。Strieber の描くヴァンパイアたちは一日 24 時間のうち 6 時間、深い昏睡状態に陥ることによって新たな生命力を獲得することを規則正しい生活パターンとしているのである³⁸⁾。

Miriam は John の異変への恐れが自分の杞憂であってほしいと祈りながらも心が暗くなり、John が若さを失った後で新しいパートナーにしようと考えている 13 歳の Alice Cavender に思いを馳せる。Alice は隣家の一人娘でヴァイオリンの才能があり、ハープシコードの演奏に秀でた Miriam とチェロ演奏が巧みな John とともに合奏するのを楽しみにしている可愛らしい少女だが、優れた知性と強烈な自我を持っており、Miriam を深く慕っていた³⁹⁾。John は、この少女が Miriam の心の中に占める領域が次第に広まりつつあるのを察知していたので、憎悪と嫉妬に駆られていた。そこで彼は、夫妻の家に泊まり込み、明け方近くに帰宅した彼らを出迎えた Alice に、死体を入れた黒いゴミ袋を地下まで運ぶのを手伝わせる⁴⁰⁾が、この恐ろしい作業を気軽に引き受けた彼女は、数日後には自分が彼に殺されてボイラーで燃やされると知るよしも無い。

帰宅後 Miriam が深い眠り—とは言え、ヴァンパイアの彼女が睡眠中に見る夢は過去の追体験であるために強烈な悪夢であることも多いとされているので、彼女が多くの悲劇を経験したことが明白である—についている間中 John は少しも眠れず、鏡で肌の老化を確認して、不吉な予感におののく⁴¹⁾。かつて Miriam が彼の新しい生命は永遠に続く⁴²⁾と約束したことを思い出した John は、自分の傍で昔と全く変わらぬ若々しく美しい姿を保ち続けている彼女に対して

激しい愛情と同時に殺意を抱き、彼女の首を絞めようとした⁴²⁾。目覚めたときに Miriam は John の前で動転した表情を見せはしなかった。しかし、熟睡の不能を契機として急速に老化が進行し、恐ろしい飢餓感に狂乱した末に崩壊して行く人間の恋人たちの体を棺に納め続けてきた彼女は、現在住んでいる屋敷の屋根裏部屋へ行き、今も生命の波動が伝わって来る恐ろしくも哀しい空間の中で、やがて John を横たえるための棺の準備を整えた⁴³⁾。このような Miriam を、自己中心的で次々に恋人を作り、役に立たなくなった人間を生きながら葬ってきた怪物と評することは短絡的である。彼女は心の奥底に無限の優しさを持っていたために、焼却すれば容易に完全な死をもたらすことができる人間の恋人たちの朽ち果てた体—そこには彼らの生命と魂が宿っている—を守り続けてきたのだと解釈できる。いかに誠実な愛情を捧げ続けても、結局、愛する者たちに自分と同じ不老不死の生命を与えられなかった失意は、彼女の心に嵐のような恐怖を起こさせた⁴⁴⁾と述べられている。Strieber が創造した Keeper としての Miriam が、これまでの世界文学史に登場したいかなるヴァンパイアとも異質の精神的崇高さを備えた超絶的存在である点に注目すべきであろう。

Miriam は *Sleep and Age* (『睡眠と寿命』) という著書を出版した若い女性医師 Sarah Roberts に深い関心を抱いていた。老齢とは治療可能な疾病であると主張している彼女が加齢を制御する血液因子を発見することに成功すれば、Miriam は、自分がヴァンパイアに転生させた人間たちに真の不死性を与えることが可能となり、John の老化を防ぎ止められるかも知れないと希望を託していたのである⁴⁵⁾。だが彼の肉体の破滅が想像以上に早く訪れた以上、Alice に永遠の若さと生命を授け、初めて完全なパートナーを獲得する鍵を握っている聡明な医師 Sarah と一刻も早く接することが Miriam にとって最も重要に思われた。Sarah は Riverside Medical Research Center で gerontology (老人学) の研究に没頭しており、彼女のグループが実験用に飼育していた2頭のアカゲザルのうちの雌の Betty を深い眠りに陥らせることで加齢現象を止めることに成功したが、雄の Methuselah (メトセラとは聖書では最も長寿であった人間とされている) が眠ることができなくなって凄まじい凶暴性を発揮して、

同じ檻の中にいた Betty を噛み殺して、体を引き裂いてしまった。その後、この雄猿は急激な加齢により、苦悶の末に死亡し、その遺骸は恐るべき速度で崩壊し、数分で塵と化した。これを観察していた Sarah は、加齢を急速に進行させられるなら、その進行を遅らせ、停止させることも可能だと確信し、人類が不死性を獲得できる鍵が自分の研究の中にあると誇らしく感じていた⁴⁶⁾。

一方 John は、突然の老いを自覚して以来、抑制しがたい飢餓感に襲われ続けて、理性も警戒心も失い、36 時間に 3 人の人間を餌食にして、何とか生命感を体に蘇らせていた⁴⁷⁾。彼の余りの醜悪さは Miriam にとって耐えられないほどになり、老いさらばえた夫から、自分を捨てないでくれ！ 助けてくれ！ 君を愛していたのだ！ 心から信頼していたのだ！⁴⁸⁾と訴えられた彼女には、自分が永遠に彼を見捨てることはない、としか答えられなかった。彼女にとって知性、決断力、闘争心を備えた理想的なパートナーに思われた John が、現実には、彼女の人間の恋人の中で最も意志の弱い男であったことは運命の皮肉であったが、彼と過ごした日々の幸福な思い出が彼女の胸に押し寄せ、自分に殺意を抱いている相手であるにもかかわらず、彼の絶望に対して深い憐憫の情を覚えた⁴⁹⁾。

不死者として一種のテレパシーを発する能力に恵まれている Miriam は、Sarah Roberts の意識の中に自分の存在を入りこませる試みに成功した。ヴァンパイアが眠っている人間の意識を支配することは多くの神話や伝説、文学作品で語られており、Miriam は、Sarah が上司の Tom Haver 医師と恋愛関係にありながらも、聡明で自立した精神の下に情熱的な恋人を渴望する飢餓感を秘めていることを看破し⁵⁰⁾、彼女が自分の親友になってくれることを期待した。次に Miriam は、夜驚症に悩まされている患者として Sarah に会うために睡眠研究クリニックを訪れる決意を固めたが、人類の科学的文献には全く存在しない自分たちの種族を人類の研究対象とさせる、この行為は Miriam の生涯において最も危険な試みであった。他の Keeper とは正反対に人間の知的業績を高く評価している Miriam ではあったが、人類とは異なる種の生物に対して人間がいかに残酷な取り扱いをするかは彼女の一部が惨殺された歴史をふりか

えれば明白であり、特に冷酷な捕食動物の性格を備えた科学者であれば、無数の猿を平然と死に追いやったのと同様に、知的好奇心と卑しい野心を満たす目的で「人類と科学の推進のため」⁵¹⁾という大義をふりかざし、Miriam を実験動物として扱うことに全く良心の呵責を覚えないであろうと推察していた。それにもかかわらず、Miriam が自らの体を実験台として Sarah に提供したのは、彼女が真の愛に飢えていたからに他ならない。自己の生涯の孤独を慰めてくれる人間のパートナーにも、自分と同じ永遠の生命と若さを与えたいという強烈な願望を達成するために、彼女はいかなる危険をも顧みなかった。Strieber が、これまでの文学史において吸血と死と悪の増殖のシンボルとして扱われてきたヴァンパイアのイメージを根底から覆し、情熱的な愛情の権化として Miriam を描き出している点を無視すべきではない。

激しい飢餓感のみならず狂気のような嫉妬の念に駆られた John は、Blaylock 夫妻との合奏を楽しむためにヴァイオリンを携えて彼らの家を訪れた Alice を殺して若々しい彼女の血を貪り、Miriam に知られぬように、急いで地下室で亡骸を燃やした⁵²⁾。更に彼は幽鬼のような姿で通行人や警官を襲い、自分に過酷な宿命を背負わせた Miriam への復讐心を抱いて帰宅した。一方 Miriam は隣家の Cavender 氏から Blaylock 家へ出かけた娘が一日経っても戻らぬことを案じる電話を受け、自分が最初の、永遠のパートナーにしようと希望を託してきた才気溢れる少女 Alice の生命を John が奪っただけでなく、自分の未来をも奪ってしまったと知り、彼への怒りと同時に底知れぬ空虚さを感じた⁵³⁾。復讐の鬼と化している John は彼に襲われぬように地下室で眠っていた Miriam の喉に刃を突き立てようとしたが、目覚めた彼女は彼の手から武器を叩き落とし、彼にとっては信じられない言葉であったが「愛してるわ」と語りかけ、彼の許しを求め、古代の神々への祈りの言葉を唱えながら、John の体を地下室の床石の下の水溜まりに放り込んだ⁵⁴⁾。Miriam のこの行動が冷酷に見えるとしても、身を守るとともに、John がこれ以上人間社会に危害を及ぼさないようにするには、やむを得なかったと推察される。

Miriam は夜驚症の精密検査を受けるために Riverside 病院に入院し、担当

医 Sarah は彼女の荘厳な美しさと静穏さに溢れた表情、慎み深い優雅さ、完全な自信に満ちた雰囲気驚嘆した。Miriam の血液を採取し、診察を行なっているうちに、Sarah は我ながら恐ろしくなるような感情に駆られた。彼女は上司で恋人でもある Tom に向かって、Blaylock 夫人を「古典的な定義における怪物」⁵⁵⁾「人間を超越した生きもの」「神々のような存在」「抗しがたく宿命的なもの」⁵⁶⁾と評しており、Sarah が Miriam の本質を的確に捉えている点に注目したい。検査の結果、彼女の血液のはなはだしい異常性と人間とは完全に異なる脳の機能によって、人類の構成員ではない未知の種の知性的な生きものが発見されたことが判明し、遺伝学者、生理学生物学者、細胞生物学者、精神科医たちをはじめ、病院中が興奮に包まれた。優れた SF 作家である Strieber は、医学上の大発見に熱狂する人々の有様を、生き生きと緻密に描き出している。特に、血液研究医が Miriam の白血球は病原菌に対する強力な抵抗力があり、体内に侵入した有機体を高度に制御する機能を持っているので、彼女の血液を血管に注入された生物は不死性を獲得することになる⁵⁷⁾と発表したとき、専門家集団は驚嘆したと述べられている。一方、この未知の生物の細胞や染色体の精密検査を直ちに行なうべきだと学者たちが強調し始めている間に、Miriam は誰にも気づかれぬように病院を抜け出して帰宅していた。Sarah は、自分がこの女性（生きもの）の危険な魅力の虜になることを恐れていたが、Miriam を病院に連れ戻すために彼女の家を訪ねた。外見はこじんまりした館だが、屋内の家具調度の全てが美術的価値を持った格調高い骨董品で、特に古代都市パルミラで作られた Lamia の図柄のモザイク模様で覆われたコーヒーターブルに Miriam が深い愛着を抱いている⁵⁸⁾ことを Strieber は、さりげなく述べている。既に指摘した通り、*The Hunger* において Miriam の母は Lamia であったとされており、細い三日月を頭上に頂いて虹の上に立っている女神の姿のモザイク模様を眺めながら、Miriam は Sarah に向かって、Lamia が若さを糧とする不死者であり、その美しさと捉え難さのために虹が彼女の象徴とされている⁵⁹⁾のだと説明している。Miriam と Sarah が庭園に出ていたとき、地下室の床下のトンネルを通過して庭の薔薇の茂みから地上に脱出した John が、

二人の背後に現われた。Sarah は幸いにも復讐に燃える John の恐ろしい姿を見なかったものの、怪しい人物が家の外にいるのに戸締まりを厳重にするだけで警察に連絡しようとしないう Miriam の態度を不審に思った。だが彼女は病院で徹夜の仕事をしていた疲労から来る睡魔に襲われたせいか意識朦朧となり、Miriam に抱き抱えられて寝室へ運ばれた。実は、John に Alice を殺害されたために彼女との新しい人生を歩むことが不可能となった Miriam は、心優しく聡明でありながらも人生への貪欲さを胸に秘めた稀有な人間 Sarah をヴァンパイアに転身させる決意を固め、彼女に催眠術をかけた後で、自分の血液を彼女の血管に注ぎ込んだ⁶⁰⁾のである。目覚めた Sarah は Miriam に誘われるままシャワーを浴び、自分の体を洗ってくれる彼女に特別な親近感を覚え、歓喜に満たされた。

Miriam の家から Riverside 病院に戻った後で Sarah は異常な空腹感に襲われ、食べ過ぎて吐いてしまったのに、夜中には再び空腹に耐え切れなくなり、近くの McDonald's へ出かける有様であった。これは彼女の体内でヴァンパイアへの転換が開始し、激しい飢えにさいなまれながらも人間の食物を消化できないように器官が変異し始めた兆候であった。更に精神的にも価値観が変わり、全ての美しい物に対して抑えがたい欲望を感じたが、それは人間ほど醜いものは存在しないという思いを反映したものであった。そして、その醜悪な生きものが住むアパートに忍び込んで彼らを殺して引き裂きたいという衝動に駆られた彼女は、我知らずアパートのテラスの縁にぶら下がっていた⁶¹⁾。このときの Sarah の突然の不気味な行動は、*The Wolfen* の中で人狼たちが彼らの憎悪の対象である二人の刑事を殺すために彼らの住まいに潜入しようとする場面を思い起こさせる⁶²⁾。Sarah は自分の思いがけない行為に驚いて地面に跳びおりたが、これまでは自覚していなかった別の人格が意識の深層から呼び起こされたのかと感じた。そして彼女は、体の中に住んでいる誰か（或いは何か）が自分とともに動き、呼吸しているような不可思議な感覚に捕らわれた。遂に自分が Miriam から輸血されたことを思い出した Sarah は Tom とともに病院へ急ぎ、検査の結果、不死性を備えた Miriam の血液が彼女自身の血管の中を流

れ、Sarah の血液を消化しながら、新たな細胞を再生しつつあるという事実が確認された⁶³⁾。

人間からヴァンパイアへの変身の過程を Strieber ほど綿密かつ詳細に描写している作家は少なく、しかもヴァンパイア側から、それを克明に記述している点において極めて独創的である。Keeper である Miriam は、輸血の過程で不適合もしくは感染症のために死亡した人間は数人いたものの、ひとたび成功して生きながらえた人間は、これまで全員が、最終的には自分を熱愛するようになったと確信していた⁶⁴⁾。だが彼女は、血液注入後の物理的効果が転換者の心身に及ぼす苦悶の凄まじさを熟知していたので、新しい人生を得た Sarah を助けて飢餓を満たしてやる義務感に迫られた。彼女を救うために、Miriam は再び病院に戻り、人間たちが企てている極めて危険な実験に身を晒さねばならず、それは、1325年にフランスのシャルル4世によって生き埋めにされてから半年間悲鳴を上げ続け、その後も仮死状態で生命を維持していた彼女の一族の悲惨な末路を想起させるような恐怖の体験になる可能性があった⁶⁵⁾。パートナーを得るのは常に容易ではなかったが、徹底的に孤独な生き方をしてきた Miriam は、いかに困難であれ、人生を分かち合う Sarah が必要であった。Miriam の生涯は人類の歴史と常に密接な関わりがあり、可能な限り人間と共生しようと試み、人間社会に見事に溶け込むことができた彼女は一族の多くの者たちのように滅ぼされることはなかったものの、心は常に孤独であった、と Strieber が読者に訴えていることを見逃すべきではない。

再び病院の Sarah と彼女の同僚たちの前に現われた Miriam は、これまで人間の遙か上空を飛翔してきた支配者としての威厳をこめて、最終的に自分を解放すると約束してくれれば自分の体について研究しても構わないと提案した⁶⁶⁾。何故自分に輸血を行なったのかと怒りを投げつけた Sarah に対して Miriam は、自分が一族の最後の者であり、太古の昔から人類が獲得しようと切望してきたこと、すなわち「死に打ち勝つ」という素晴らしい贈り物を彼女に贈ったことを理解してほしい⁶⁷⁾と述べた。そして「私たち二人のために私はあなたに自分の血液を注入したが、あなたには助けが必要になる。」⁶⁸⁾と彼

女は告げた。Miriam との深い絆を感じ始めた Sarah には Miriam が純粹で愛と善意に満ちた天使のように感じられ、自分自身も彼女と同じ高みにまで昇って行くことができるように思われた⁶⁹⁾、と述べられており、Sarah が Miriam の神秘的な魅力に心を奪われて行く過程が実に見事に描写されている。Miriam の身体構造についての様々な検査が一日中行なわれた後、Tom Haver 医師は、彼女の意志に反して引き止めはしないという約束⁷⁰⁾をいともたやすく翻し、精神科病棟の病室に拘禁することを決断した。もともと Miriam が愚かで卑劣な人間たちに自分を幽閉させることを許したのは、独立心と正義感に富んだ Sarah が不当に監禁されている彼女を救うために行動を起こすに相違ないと確信した⁷¹⁾からであるので、彼女の洞察力の鋭さに読者は強い印象を受けるであろう。Miriam が推察した通り、Sarah は、高い知性を持つ生きものとしての全ての尊厳と権利を剥奪されて彼女が監禁されていることを邪悪な行為とみなし、自分自身の研究の真価にも疑問を抱くようになり、同時に、冷徹で非情な態度を貫き通す Tom という男を心から愛しているかどうか自信が持てなくなってきた。更に、もし Miriam の血液によって老化現象が食い止められるとすれば、それは Sarah Roberts のみならず全人類への尊い贈り物であり、自己の種の最後の生存者として高潔な行為を行なったと賞賛されるべきなのに、囚われの身の待遇に耐えている以上、彼女を自由にすべきであると決断した。脳波の記録を観察しながら、Sarah は、これほど高度に知性的な脳を持つ生きものを実験動物として監禁することは道義に反するばかりか、この上なく凶悪な罪に他ならないと恥じた⁷²⁾。従って Sarah の眼には、Miriam の体の構造について興奮しながら論じている学者たち全員が、邪悪、或いは盲目的な存在として映った。すなわち Miriam の荘厳な美しさをチャートやグラフなどで表現できると考えている科学者と称する人々の愚かしさを Sarah は思い知った。Miriam が彼女の血液を自分に注入した行為は、人類の老化に関する豊富な知識を持っているがゆえに人類の代表ともみなせる Sarah Roberts に不死の能力を受け継がせるために行なわれたもので、Miriam の勇気と愛情のあらわれと解釈されるべきなのに、何故それが血の洗礼とみなされるのかと

Sarah は訝しんだ⁷³⁾。 *The Hunger* がヴァンパイア文学の古典として高く評価される理由は、作品の中で非常に深遠な哲学的・倫理的問題が提起されているとともに、文学的香気に溢れていることによる。囚われの身となり、人間たちの実験対象という屈辱的な境遇に甘んじている Miriam に対して Sarah が深く同情する場面を描いた箇所は、Strieber がこの小説の本文の前に引用した Keats の *Lamia* の詩句と、その前後の部分を思い起こさせる。すなわち作者は、人間が「学問」と称するものが人知を超越した神話の世界の生きものの麗しい翼を挟み取り、あらゆる神秘的な存在を無味乾燥な物に変えてしまい、*Lamia* のシンボルである虹をも消してしまうと示唆しているのである。

Sarah が科学者たちの会議を抜け出して独房を訪れたとき、Miriam は彼女自身の飢餓感に襲われて、窓格子を外して脱走しようとしていた。伝統的なヴァンパイアと同じく並外れた運動神経を持つ彼女は壁を伝って16階下の歩道に難なく降り、以前から目星をつけていたアパートに忍び込み、そこに住む若夫婦のうちの夫を襲う⁷⁴⁾。Miriam が猫の声をまねて夫をおびき寄せる「狩り」を描いたこの箇所は、*The Wolfen* の人狼が子供の泣き声をまねて女性刑事をおびき寄せようとした行動を彷彿とさせる⁷⁵⁾。その後、Miriam は妻にクロロホルムを嗅がせて家に連れ帰り、Sarah の獲物にするためにクローゼットに閉じ込めた。

既に通常の食物を極度に嫌悪するようになっていた Sarah は深刻な飢餓をいかにして満たせばよいか分からなかったので、病院から脱出する直前の Miriam と約束した通りに彼女の家を訪れた。Miriam は Sarah を動揺させぬように真暗なベッドルームに招き入れて、自分が襲っている女の血を彼女の口の中に注ぎ込んだ。Sarah は自分が何を飲んでいるのか、この時点では理解できなかったが、鼓動する温かい液体が喉に流れ込むにつれて、身も心も烈しい歓びで燃え上がった。Miriam が自分の愛する Sarah を救おうとしていることは言うまでもないが、暗闇の中で若い女の命を奪い、その血を何も知らぬ Sarah に与えている場面⁷⁶⁾ は *The Hunger* の中で最も恐ろしい場面の一つである。

「ようこそ、神の国へ」⁷⁷⁾と呼びかけるとともに Miriam が部屋の明かりをつけたとき、彼女は化粧を落とし、^{かつら}鬘も外して、本来の姿を Sarah の前に現わした。彼女の姿はギリシャ神話に登場する女神アテナかエジプト神話の女神イシスを思わせる崇高さに包まれ、眼は黄金の輝きを放ち、肌は大理石のように白く滑らかで、髪は天使の髪のように細く柔らかく、黄金色であった。完全に人間を超越した存在としての Miriam は、絶対的な権威に満ちた声で「汝は秘密について学ばねばならぬ」⁷⁸⁾と告げたが、その後で、声には出さぬテレパシーで、Sarah の心に愛の告白を伝えた。不可思議な食物が消化されるにつれて、Sarah は新たな知覚力が誕生したことを感じ、捕食動物の本能がとぎすまされ、特に嗅覚が極めて鋭くなり、Miriam の放つ芳香に満たされて眠りについた。

一方 Sarah の身を案じて Miriam の家を訪れた Tom Haver を待ち受けていたのは、Miriam への復讐の念に燃える John が屋根裏部屋に安置されていた棺の錠を開けて自由にしてやった幽鬼一すなわち Miriam のかつての恋人たち一であった。John は彼らに Miriam を襲わせようと企てていたのだが、玄関ホールの闇の中で正体不明の怪物たちの攻撃に遭遇したのは Tom であった⁷⁹⁾。彼は、恐ろしい家から退散しようとして扉をよじ登ったときに怪我を負い、警察に Sarah を帰宅させてほしいと頼んだが、要請を受け入れてもらえなかった。Miriam は屋根裏部屋から脱け出した者たちを再び棺に戻し、もはや自力では立ち上がる体力すら失っている John を、彼のために準備しておいた最も新しい棺に納めた。彼女は「他の者たちにしたのと同じ約束をあなたに対してもする...時の終わりが来るまで私はあなたをそばに置いておく。あなたを棄てることも忘れることもない。私はあなたを愛することを決して止めはしない。」⁸⁰⁾と John に語り、涙を流しながら、ねじ釘を一本ずつ締めていった。このときの Miriam を冷酷非情と非難することは余りにも容易であるが、Strieber が小説の本文の前に引用した Tennyson の詩 *Tithonus* の終わりに近い部分で、女神 Eos が、不死の身にはしてやれたが不老にはしてやれなかった夫のために落涙する場面⁸¹⁾と酷似していることを忘れるべきではない。

めざめた Sarah はベッドの下に自分が生命を奪った女の亡骸を見つけて凄まじい衝撃を受けて Miriam を殺人者と罵ったが、健康な若い女性の生命を奪うことによって新たな活力を獲得した事実は否定できなかった。Miriam は、Sarah が人間とは異なる種の生きものとなった以上、古い価値観を捨て去り、新しい生き方を受け容れるべきだと説いた⁸²⁾。Miriam が Tom のもとへ帰りたがっている Sarah を引き止めなかったのは、彼と再会した Sarah が飢餓ゆえに彼を殺したいという欲望を必死で抑え、最終的には必ず自分のところへ戻って来ると看破していたからであり、まさしく彼女の予想通りになった⁸³⁾。

Sarah の後を追って再び Miriam の屋敷を訪ねた Tom は、にこやかな微笑を浮かべた彼女によって直ちに家の中に招じ入れられ、前夜、彼が亡者たちに襲われた玄関ホールは、極めて清浄な様相を呈していた。そして Sarah が閉じこもっている二階の美しい寝室の窓からは壮麗な花園を見渡すことができ、部屋の中も沢山の花で飾られていたが、Tom には、それらの花々が Miriam の罪を確証するもののように忌まわしく思われた⁸⁴⁾と述べられている。半睡状態にあった Sarah の体は狂的な飢餓感に蝕まれ、精神はその飢餓感を弁解し、正当化する言葉を呟き続けていた。Tom と抱擁し合いながらも、Sarah の意識の深層で、彼に警告し、彼をすぐに追い出せという悲鳴が発せられていたが、彼を積極的に誘惑する結果となり、遂に彼女は Miriam がナイトテーブルの上に置いて行ったメスを Tom に何度も突き立て、キスをしているつもりで血を吸い込み、彼の命を奪った。全身が歓喜で恍惚となったが、自分が殺した Tom の亡骸から悲しみと憫れみと平安の感情が流れ出ているのを悟った Sarah は激しい悲嘆の叫びを上げた⁸⁵⁾。Miriam は転換者のこのような絶望的な苦悶が殺意をこめた怒りに変わると知りながらも Sarah を慰めようと努め、「私にはあなたの気持ちがよく解るけれども…あなたはこれまで以上に多くの生きる目的を獲得した。」⁸⁶⁾と情愛をこめて語りかけたが、Sarah は「私は自分の愛する人を殺してしまった。その気持ちがあなたに理解できるとは思えない。私は、これまで以上に多くの生きる目的を獲得してなどいないし、もはや生きている理由もない。」⁸⁷⁾と答えた。Miriam は Sarah に「あなたは人類とは

異なる種族に加わった。我々にも生きる権利はある。そして必要以上に多くの人を殺しはしない。」⁸⁸⁾と告げる。「あなたは人間以上の存在となった。人間の生殺与奪の権利を獲得したのだ... 私はあなたに新しい生命—生きるに値する生命を与えた。これはあなたが想像できないほど素晴らしい生命なのだ... あなたを愛している。」⁸⁹⁾と語る Miriam に向かって Sarah は「あなたは自分自身しか愛していない！ あなたは怪物よりも忌まわしい。あなたには私も他の誰も愛することができない。あなたには人を愛することができない！」⁹⁰⁾と叫んだ。Sarah の言葉に真実が含まれていることは否定できないが、Miriam が恐ろしい危険を冒して人間たちに実験の素材として我が身を提供したのは、Sarah への命がけの愛ゆえであった事実を決して忘れるべきではない。Strieber は「Keeper には人間のような霊魂がない。」⁹¹⁾「Keeper たちは霊魂の存在を否定してきた。」⁹²⁾と彼の作品の中で繰り返し語っているが、作者自身、無意識のうちに、人間の血を糧としてしか生きられない点においては忌まわしいが、知性・情緒・容姿など、その他のあらゆる面で人類を超越した、限りなく神に近い存在を世界文学の中に創造したと言えよう。すなわち Keeper が真に超絶的存在であるとすれば、神々と同様に、地球上のあらゆる生物の生殺与奪の権利を有しているはずである。次に Strieber の *The Last Vampire* で述べられている通り、Miriam はバラモン教の聖典ヴェーダを熟読し、「刹那」のみが存在するという境地に達している⁹³⁾。キリスト教と異なり仏教においては、個々の人間の魂の不滅性は否定されており、現世における生老病死、悲嘆苦悩を克服することが第一とされているので、現世において永遠に近い生命を有しながらも、一瞬一瞬を充実させて生きることの尊さを熟知している Miriam の人生観は決して誤ったものとは思われない。

Sarah は次の飢餓感に襲われる前に死んでしまおうと思いつつも眠りこみ、夢の中で「君は僕を殺した」と絶望的に叫び続けた後に、彼女には耐えられぬほどの悲しみを湛えた目を向けて「君を許すよ」と言っている Tom の姿を見る⁹⁴⁾。だが意識を回復した Sarah は新たな激しい飢餓感に苦しめられることになるので、Miriam は彼女のために獲物を捕らえ、メスで手際よく血管を

切開して、傷口から全ての生命を吸収する方法を彼女に教えた。しかし Sarah は自分の喉を流れる熱い生命を得たいという願望で狂乱しながらも、獲物ではなく Miriam を殺そうと試みたが、Miriam は敏捷な身のこなしで攻撃をかわした⁹⁵。実は、この日の朝でさえ、Sarah は、Miriam からの「贈り物」を受け取って不死の寿命を獲得し、死とは疾病に他ならないことを立証して、人類に死の秘密を伝えることができるのではないかと考えていたのだが、飢餓感を抑えられずに自分が真に愛していた恋人を殺してしまった事実により、永遠に生きることの代償として支払うべき代償の余りの大きさに戦慄した⁹⁶。そこで Sarah は、飢餓を満たすために人を殺すことは二度とすまいと決断して、メスを手首に深く突き立て「Tom、愛しているわ」と言いながら倒れ、自分が死んだと信じようとした⁹⁷。だが冷徹な Miriam が叫んだように、Sarah は「死ぬことができず、血を放出してしまった以上、生きることもできない」状態に陥り、自分の「意識」が存在していることは否定できなかった。「あなたは私の世界の果てに行ってしまった。そしてあなたの前に現われることになっていた全ての美を手に入れられなかった。」⁹⁸と悲嘆に暮れながら、Miriam は Sarah を抱き上げて、棺に納めるために屋根裏部屋に向かった。映画 *The Hunger* では、この場面で、John をはじめとする Miriam のかつての恋人たちが棺を抜け出して彼女に襲いかかろうとし、余りの恐怖に慄然とした彼女は階段から転落し、その肉体は急激に崩壊することになっている。更にヴァンパイアとして復活した Sarah は Miriam と外見的にはほぼ同じような生き方を選び、Miriam の亡骸を納めた棺から悲痛な叫びが発せられる情景で映画は終わる。この映画が詩的・耽美的美しさに溢れていることは非常に高く評価できるが、Miriam のように強靱な意志を持って幾多の悲劇と苦難を克服し、常に前進し続けてきた、極めてしたたかな存在が、屋根裏部屋で朽ちかけている妖怪たちに脅されて正気を失い、陳腐な怪奇映画の主人公と同じように醜悪な姿に変貌するシーンは納得できないと言わざるを得ない。そして Sarah が復活できたとしても、生粋の Keeper ではない以上、所詮、永遠の生命を得たわけではないので、やがては自滅する宿命を背負っているはずであり、Sarah が Mir-

iam の後を継いで彼女と同じように女王然とした態度で、若い恋人たちに囲まれている姿が最後の部分で描かれているのも論理的な結末とは言えないように思われる⁹⁹⁾。要するに、人間を超越する誇り高い Keeper としてのヴァンパイアの尊厳も、神に近い絶対者に挑戦して自己の命を犠牲にしても志を貫いた人間の魂の崇高さも、映画では重視されておらず¹⁰⁰⁾、流麗なクラシック音楽の調べと洗練された映像表現のみが観客の心に残り、倦怠と頹廢の雰囲気が漂っている。

原作では、Miriam は Sarah を棺に納めて掛け金を下ろし「可哀想なあなた、他の全ての愛する者たちにしたのと同じ約束をあなたにもしよう。私は常にあなたをそばに置き、決して見棄てはしない。そしてあなたは常に私の心の中にいる。」¹⁰¹⁾と Sarah の棺の上で語る。飢餓感は、生前に較べれば減ったものの、依然として存在し、棺の闇の中に閉じ込められた恐怖は地獄のように恐ろしかったが、自分をまだ人間とみなすことができた Sarah は、棺の中で自分の心を見つめ、豊かな安らぎと愛を見出し、Tom と過ごした日々の思い出に満たされて、悠久の年月の後に彼岸で彼と再会できることを喜んだ¹⁰²⁾。

Sarah をパートナーにすることができなかった Miriam は、New York の屋敷を去り、San Francisco に居を移した。時そのものが消滅するまで、孤独を癒してくれるパートナーを探し続けることが宿命であると彼女は自ら認めていたので、新しく選んだ男に微笑みかけていた。だが彼女は愛した者たち全ての棺を新居の地下石炭貯蔵庫に移し、棺の中の Sarah に対して、しばしば語りかけた。強固な意志と精神力の持ち主であった彼女は苦痛しか知らず、Miriam が授けようとした新しい人生の歓喜を知ることはなかった。Sarah を失うという経験をするまで、Miriam は、愛の真実を求めて手探りで進む人間の精神がいかに高い境地に到達できるか想像もできなかった。Miriam がパートナーとして求めていたのは、従順な奴隷ではなく高い知性と強固な自我の持ち主だったので、Sarah ほど優れた人物であれば完璧なパートナーとなりえたであろうが、このような悲劇を生んだ以上、Sarah のような勇気と高潔さを持つ人間を転換させるべきではないと彼女は心に誓った¹⁰³⁾と述べられており、

Keeper に較べれば余りにもはかなく弱い存在ではあるが、信念や誠の愛のために命を捧げる人間の精神の気高さに Miriam が畏敬の念を抱いたことが明らかであろう。

【注】

- 1) Whitley Strieber, *The Last Vampire* (New York: Pocket Star Books, 2001) pp. 1-2., p. 50.
- 2) *Ibid.*, p. 331.; Katherine Ramsland, Ph. D., *The Science of Vampires* (New York: Berkley Boulevard Books, 2002), p. 61.
- 3) Whitley Strieber, *op. cit.*, p. 23.
- 4) *Ibid.*, p. 2.
- 5) Strieber の独創的なヴァンパイア神話は、我が国の作家・菊地秀行の『吸血鬼ハンター“D”』とかなり共通点があるが、菊地氏の作風は日本の時代劇小説的な雰囲気濃厚であり、Strieber のように古代エジプト、ギリシャ・ローマ神話をバックボーンにしてはいない点に注目すべきであろう。但し、海外で最も高く評価され、愛されている日本のヴァンパイア文学の一つが『吸血鬼ハンター“D”』であることは間違いなく、この小説をアニメーション映画化した *Vampire Hunter D* が国際的にヒットし、ゲームや漫画が国内外で人気を誇っている事実は、文化的コンテンツとしての「ヴァンパイア」が不滅の生命を持っていることを立証するものである。
- 6) Whitley Strieber, *op. cit.*, p. 45.
- 7) Whitley Strieber, *Lilith's Dream : A Tale of the Vampire Life* (New York: Atria Books, 2002), p. 16.
- 8) Whitley Strieber, *The Hunger* (New York: Pocket Books, 1981), p. 47., p. 177.; Whitley Strieber, *The Last Vampire*, p. 7. Miriam がギリシャ人 Eumenes をヴァンパイアに転生させたのは紀元前 71 年で、彼の肉体が急速に朽ち始めたのはヴァンダル人がローマへ侵略を開始した 5 世紀である。そしてこの時期に Miriam が転生させた Lollia は 1430 年に魔女として処刑された、とあるので、彼女は 5 世紀から 15 世紀までの約千年間、若さを保ち続けたと推察される。
- 9) Tennyson's Poems "Tithonus" Summary and Analysis GradeSaver <http://www.gradesaver.com/tennysons-poems/study-guide/summary-tithonus>
- 10) Whitley Strieber, *The Hunger*.
- 11) Alfred Tennyson, *The Works of Alfred Lord Tennyson* (Hertfordshire: Wordsworth Poetry Library, 1994), pp. 553-554.
- 12) Whitley Strieber, *op. cit.*
- 13) John Keats, *The Complete Poems* (London: Penguin Books, 2006), p. 431.
- 14) Whitley Strieber, *The Last Vampire*, p. 196.
- 15) Whitley Strieber, *op. cit.*, p. 14.

- 16) Whitley Strieber, *The Wolfen* (New York: William Morrow and Company, Inc., 1978), p. 7.
- 17) Whitley Strieber, *The Last Vampire*, p. 17.
- 18) *Ibid.*, p. 6.
- 19) *Ibid.*, p. 7.
- 20) Whitley Strieber, *The Hunger.*, p. 39., pp. 93-94.
- 21) *Ibid.*, p. 37.
- 22) *Ibid.*, pp. 28-30.
- 23) *Ibid.*, pp. 31-32.
- 24) *Ibid.*, pp. 33-38.
- 25) *Ibid.*, pp. 38.
- 26) *Ibid.*, pp. 89-92.
- 27) *Ibid.*, pp. 177-180.
- 28) *Ibid.*, pp. 9-11.
- 29) *Ibid.*, p. 12.
- 30) *Ibid.*, p. 17.
- 31) Bram Stoker 作 *Dracula* の中ではヴァンパイアの貴婦人の一人が Dracula 伯爵に向かって “You yourself never loved; you never love!” と嘲笑している。Bram Stoker, *Dracula*, p. 62.
- 32) Whitley Strieber, *op. cit.*, p. 18, p. 104.
- 33) *Ibid.*, p. 200.
- 34) *Ibid.*, p. 119.
- 35) Anne Rice 作 *The Vampire Chronicles* のシリーズの中で最も魅力的な登場人物であるヴァンパイア Lestat は、罪人しか殺さないという誓いを忠実に守り、賭博師、泥棒、売春婦、殺人者だけを餌食とし、罪なき者の命を奪わぬよう自己に命じてききたと明言している。Anne Rice, *The Vampire Lestat, Book II of the Vampire Chronicles* (New York: Ballantine Books, 2010), p. 499.
- 36) Whitley Strieber, *op. cit.*, p. 1.
- 37) *Ibid.*, p. 19., p. 47.
- 38) *Ibid.*, p. 38.
- 39) *Ibid.*, p. 45., p. 67., pp. 19-20.
- 40) *Ibid.*, pp. 22-24.
- 41) *Ibid.*, pp. 38-39.
- 42) *Ibid.*, pp. 40-41.
- 43) *Ibid.*, pp. 48-49.
- 44) *Ibid.*, p. 49.
- 45) *Ibid.*, p. 48., p. 55., p. 70.
- 46) *Ibid.*, p. 77.
- 47) *Ibid.*, p. 86.
- 48) *Ibid.*, pp. 79-81.

- 49) *Ibid.*, pp. 102-103.
- 50) *Ibid.*, p. 126.
- 51) *Ibid.*, p. 162.
- 52) *Ibid.*, pp. 97-101.
- 53) *Ibid.*, pp. 141-143.
- 54) *Ibid.*, p. 152
- 55) *Ibid.*, p. 169.
- 56) *Ibid.*, p. 170.
- 57) *Ibid.*, p. 196.
- 58) *Ibid.*, p. 202.
- 59) *Ibid.*, p. 202.
- 60) *Ibid.*, pp. 161-162., p. 249.
- 61) *Ibid.*, pp. 243-248.
- 62) Whitley Strieber, *The Wolfen*, pp. 71-74.
- 63) Whitley Strieber, *The Hunger*, pp. 258-259.
- 64) *Ibid.*, p. 264.
- 65) *Ibid.*, pp. 262-263.
- 66) *Ibid.*, p. 272.
- 67) *Ibid.*, p. 267., p. 273.
- 68) *Ibid.*, p. 281.
- 69) *Ibid.*, pp. 281-282.
- 70) *Ibid.*, p. 272.
- 71) *Ibid.*, p. 288.
- 72) *Ibid.*, pp. 291-292.
- 73) *Ibid.*, pp. 296-297.
- 74) *Ibid.*, pp. 300-302.
- 75) Whitley Strieber, *The Wolfen*, pp. 47-49.
- 76) Whitley Strieber, *The Hunger*, p. 308.
- 77) *Ibid.*, p. 309.
- 78) *Ibid.*, p. 309.
- 79) *Ibid.*, pp. 313-315.
- 80) *Ibid.*, pp. 318-319.
- 81) Alfred Tennyson, *op. cit.*, p. 554.
- 82) Whitley Strieber, *The Hunger*, pp. 320-321.
- 83) *Ibid.*, p. 328.
- 84) *Ibid.*, p. 335.
- 85) *Ibid.*, pp. 339-340.
- 86) *Ibid.*, p. 341.
- 87) *Ibid.*, p. 341.
- 88) *Ibid.*, p. 342.

- 89) *Ibid.*, pp. 342-343.
- 90) *Ibid.*, pp. 343-344.
- 91) Whitley Strieber, *The Last Vampire*, p. 54., p. 104., p. 354.
- 92) *Ibid.*, p. 4.
- 93) *Ibid.*, p. 10.
- 94) Whitley Strieber, *The Hunger*, p. 346.
- 95) *Ibid.*, pp. 348-349.
- 96) *Ibid.*, p. 352.
- 97) *Ibid.*, p. 353.
- 98) *Ibid.*, pp. 353.
- 99) S. T. Joshi (ed.), *op. cit.*, p. 162
- 100) William Patrick Day は、*The Hunger* の原作小説において Miriam が生き残ることに成功したにもかかわらず、限りある生命しか約束されていない人間の精神的卓越性が強調されているのに対して、映画 *The Hunger* はヴァンパイアこそ真の唯一の勝利者であることを明示していると指摘している。Day の分析は優れたものではあるが、原作における Miriam の知性や豊かな感受性に対しての考察が全くなされておらず、更に映画の最後でヴァンパイアとしての生を受けた Sarah が決して精神的には満ち足りてはいないことが示唆されている点を見逃しているの、彼の説を全面的には受け容れられない。しかし彼が主張している通り、原作の方が映画よりも芸術的に遙かに深みを持っていることは間違いないであろう。(William Patrick Day, *op. cit.*, pp. 91-93.)
- 101) Whitley Strieber, *op. cit.*, p. 354.
- 102) *Ibid.*, pp. 354-355.
- 103) *Ibid.*, p. 357.

II 種の存続のために闘い、人間の愛を信じようとしたヴァンパイア Miriam Blaylock

The Hunger の続編 *The Last Vampire* は、前作ほど緻密な構成ではない面があり、極めて冷静な Miriam が慎重さを失った行動を重ねている点、やや不自然に思われるかも知れないが、二つの作品の間に存在する 20 年という時の流れの中で、Keeper たちの存在が人間によって徹底的に危うくされつつあったという事実を知って驚愕した Miriam が、彼女自身、幾度も死に直面した後、我が子を出産できるという奇跡的な幸運に恵まれて以来、歓喜の余り、真の愛は種の壁や憎悪を越えられると信じて楽観的な行動を取ったのだと

解釈することができる。更に *The Last Vampire* において、人間からヴァンパイアと呼ばれている種族の正体は、彼らが猿から進化させた人類を飼育・管理し、その血液を食糧としていた Keeper たちであり、しかもこの種族は、地球にやって来た異星人であったという Strieber 独自の世界観の全容が初めて明らかにされる点は、まさしく特筆に値する。

Sarah の自殺後 Miriam は Sarah の研究論文を熟読し、Keeper と人間の血液の相乗効果に関する深い知識を獲得して実験を行なった結果、仮死状態になった Sarah を蘇生させることに成功した¹⁾。続編の中で Miriam が Sarah を生還させたことについて懐疑的な研究者は存在する²⁾が、作者 Strieber が Sarah という人物に対して深い愛着を抱いていたことの表われと解釈することが可能である。こうして Miriam が2千年間試み続けてきた努力は報いられたが、John Blaylock を含めた他の転換者たちを蘇らせることはできなかった。Sarah は愛する男を殺害した良心の呵責に耐え切れず心の平安を得るために自殺したものの、死ぬことができず、徐々に朽ちて行く肉体の中に閉じ込められた意識が幾度となく発狂するという責め苦しさにまかれていたので、新約聖書の中でラザロが自分を蘇生させたキリストに感謝したのと同じように Miriam の虜となった³⁾。だが Sarah は現世に復活できたことを喜び、Miriam を深く愛したものの、隷属的態度をとらず自尊心を保っているがゆえに、複雑な関係ではあるが、Miriam が真に信頼できるパートナーとなった。そしてヴァンパイアに変身したとはいえ、人間を餌食とすることを殺人とみなしている Sarah はできる限り人間の生命を奪わず、血液銀行の保存血液で栄養補給を行ない、しばしば Miriam から輸血してもらっていた⁴⁾。ヴァンパイアに転生しながらも人間を襲うまいと苦悩する Sarah は、Anne Rice の *Interview with the Vampire* に登場する Louis de Pointe du Lac、L. J. Smith の *The Vampire Diaries* に登場する Stefan Salvatore、Stephenie Meyer の *Twilight* シリーズに登場する Edward Cullen と共通している。

21世紀の New York で最高級のナイトクラブ The Veils を経営して莫大な利益を上げている Miriam は、生来の美貌に加えて今や富も権力も所有してい

た。しかし彼女は悲惨な結末に終わる人間の恋人たちとの関係に完全には満足しておらず、Keeper 一族の理想的な男性を愛し、彼との間に子供をもうけることで自分たちの種を存続させたいと切望していた⁵⁾。だが、既に *The Hunger* の中で述べられていた通り、世界中に存在していた Miriam の一族は、人間の激増と彼らのテクノロジーの急速な進歩に圧倒されて闇の世界で密かに暮らすようになり、生き残った者たちも人間に殺されて、その数は減少の一途を辿っていた。そこで彼女は百年に一度開催される Keeper の秘密集会で伴侶を見つけないと願い、アジア地区での開催地であるタイのチェンマイの寺院の地下室に向かった⁶⁾。アジアには一族のなかでも最も裕福で最古の Keeper が 100 名以上存在しているはずだったが、Miriam の訪れた神聖な会場場所は荒れ果てて、唯一人の Keeper もおらず、壊された書棚の上に、人間には解読できない独特の絵文字で Keeper の名前と彼らが管理する人間の群れについて記した Books of Names のうちの一冊が残されていたが、中味はボロボロになっていた。彼女はアジアの Keeper が全滅したことを知って気も狂わんばかりだった⁷⁾ が、ヨーロッパに住む一族に一刻も早く危機を警告するために、バンコク空港からパリへ向かわねばならないと感じた。だが New York を発つ前に食事を済ませずに空腹に耐えてきたために、彼女はバンコクに向かう飛行機の中で激しい飢餓感に襲われ、隣席のタイ人の男を餌食にすることにした⁸⁾。彼女は売春婦を装ってバンコクの高級ホテルに男を誘い、血を吸ったが、所持品を調べた所、自分が命を奪った男の正体がインターポールの警部補であったことを悟った。チェンマイで起こった大虐殺の発見以来、余りにも気が動転していた Miriam は、餌食にした人間の残骸の処理を怠って現場から逃走したが、それは、これまでの 3000 年の生涯で一度も犯したことがない恐ろしい失策であった⁹⁾。

Miriam の同族を殲滅したのは、ヴァンパイア掃討作戦に携わる CIA の特別班の捜査官で、彼らを率いる 48 歳の Paul Ward は、Miriam の危惧した通り、チェンマイで発見した Books of Names を解読して、部下を率いてアジアに住む Keeper を皆殺しにした¹⁰⁾。Strieber が、アジアにおいてヴァンパイアによ

る襲撃が最初に発見されたのが1989年の日本においてであった¹¹⁾としているのは誠に興味深い。PaulはMaryland州AnnapolisのSt. John's Collegeに通っていたが、12歳のときに父親を正体不明の怪物に惨殺された記憶に捕らわれ続け、大学を中退してCIAの秘密捜査官となり、ヴェトナム、ラオス、カンボジアで暴力的な生活に明け暮れた後にヴァンパイア殲滅作戦に烈しい執念を燃やしていた¹²⁾。彼はアジアの怪物たちを絶滅させた後、ヨーロッパでの掃討活動の根拠地パリに向かう予定であったが、チェンマイの寺院でヴァンパイア捜査に携わっていたはずのタイ人の警官がバンコクの高級ホテルで女ヴァンパイアに殺害された現場検証を行なうはめとなった。

一方Miriamはパリの空港で危うく捕らえられる所であったが、機敏に行動して逃亡した。しかしNew YorkのSarahに何度電話をかけても通じず、亡き母が建てたCastle of the White Queen（白い女王の城）へ行き、そこに住む母の友人Martin Souleと会うことにした¹³⁾。彼は古代から生きてきた非常に賢明な男性Keeperで、巧みに人間社会に溶け込んで豪華な生活を送っていたが¹⁴⁾、Miriamと最後に会った50年前の面影は全くなく、飢餓のために憔悴し切って幽霊のような姿と化していた¹⁵⁾。我々は人間のテクノロジーが未曾有の発展を遂げた半世紀の間にパリのKeeperたちが著しい窮境に陥ったのだと推察できる。飢えた仲間に獲物を与えてやるためにMiriamはカフェで誘惑した男を白い女王の城に連れて行き、この男の血でMartinは生気を回復したが、皮肉なことに今回もMiriamが襲った相手は警官であった¹⁶⁾。

彼女は、これまでの飢餓にMartinがいかにして耐えてきたのか疑惑を抱いた。Martinの話によれば、第二次大戦中Denfert-Rochereauの地下納骨堂ダンフェールロシュローに秘密司令部を置いたレジスタンスが、更に下方に造られた太古の迷宮にいるKeeperたちの声を聞きつけており、戦後、社会福祉組織から派遣された人々が地下納骨堂にすむ「野蛮人たち」に外へ出てくるよう呼びかけたときにKeeperの一人が彼らを餌食にしてしまった結果、人間たちに追われる身になった¹⁷⁾、ということであった。Martin自身も捕らえられた経験があったが、故意に逃亡するようし向けられ、白い女王の城に閉じこもり、野良猫や鼠の血

そして蠅までも食料として命を繋いできた¹⁸⁾。人間たちが、彼らの概念では「殺人」とみなされる行為を Martin が実行しようとしたときだけ阻止し、それ以外は、ここ数年彼を放っておいたのは、彼を^{おとり}囷にして仲間をおびき寄せようと企てているからだと看破した Miriam は、屋敷に火を放ち、自分たちを殺すために押し寄せてくるに相違ない人間の追手を逃れて、地下の脱出トンネルから外へ出る計画を立てた¹⁹⁾。ところが人間たちが、このトンネルをコンクリートで塞ぎ、鉄の棒で強化してしまったので、彼女は抜け出すことができず、火災が発生している一階まで煙突の内部を這い降り、地下の暖炉の奥の壁から煉瓦を引き抜き、排水管の中に体を押し込んだ²⁰⁾。Strieber は、Keeper の骨は人間と異なり、柔軟性に富んでいるので、このときの Miriam のように体を折り曲げることが可能であったと述べており²¹⁾、Miriam の母とされる Lamia が神話や伝説の中で蛇女の姿で描写されることが多いのを思い起こせば、充分納得できるであろう。

Miriam の耳には、体を燃やされている Martin の絶叫が聞こえ続け、彼女の援助で一時的に生命力を回復した彼は最終的には、最も過酷な緩慢な死を迎えることになった²²⁾。更に、消火作業中の人間たちが配水管の障害物を除去しようとして Miriam を発見すれば、彼女を容赦なく引きずり出して、非業の死を遂げた彼女の母親と同様に完全な灰と化すまで焼き尽くすか、血流が止まるまで心臓に杭を打ち込んで、いかに長くかかろうとも棺の中に閉じ込めて彼女を死に至らしめるか、頭部を吹き飛ばした後で体の残りを酸の中で溶解させるか、どのような方法で自分を殺すのだろうか²³⁾と彼女は想像した。このようにヴァンパイアの視点から見れば、人間がいかに残酷で慈悲心の片鱗も持たない生きものであるかについて *The Last Vampire* では前作以上に詳述されている。だが強靱な意志で恐怖を克服した Miriam は、出血している自分の生肉を齧ろうとして近寄って来たドブネズミを捕らえて血を吸い尽くすことで、何とか生気を取り戻した²⁴⁾。この場面は *Interview with the Vampire* の中で主人公 Louis が空腹を満たすためにドブネズミを食べていた情景を思い起こさせる²⁵⁾。Miriam は窮屈な姿勢で配水管の内部を移動するうちに、突然広い放水路へ押

し流され、澄んだ川に行き着いた。彼女は近くの鉱泉で火傷を洗ったが、消耗した体にエネルギーを回復するために、急いで人間を餌食にする必要が生じた。彼女は下水道の壁の梯子を昇って、白い女王の城の向かい側のタペストリー工場に潜り込み、若い女性の織工を襲い、新鮮な血液によって傷は治って行った²⁶⁾。織工の衣服を身につけた Miriam は迅速に餌食の残骸を焼却して外に出て、焼け落ちた白い女王の城の前で、火炎放射器を持った人間たちが Martin を完全に殺すために彼に火を浴びせているのを見た。彼らは Martin の骨を灰と化すまで燃やし、道路に放水して遺灰を排水溝に流し込んだ²⁷⁾。この凄惨な光景にも動じず、Miriam は織工の住んでいたアパートに身を隠し、頭髪を全て失い焼けた自分の姿を鏡で見て驚いたものの、入浴による血流の改善で、急速に傷は癒えて行った。激しい睡魔に襲われながらも彼女が第一に思いついたのは、パリに住む Keeper たちに危機を警告する義務を果たさねばならないという使命感と責任感であった²⁸⁾。我々は普通ヴァンパイアという名称で呼ばれる Keeper たちが極めて社会的な生きものであり、自らの生命の危険をも顧みず相互に助け合う特性を持っていることを Strieber が描いている点に注目すべきであり、Anne Rice の *The Vampire Chronicles* の中でも同様の記述がしばしば見出だされる²⁹⁾。

短い黒髪の鬘をかぶり、カジュアルな服装で Denfert-Rochereau の地下納骨堂を訪れた Miriam は魅力的な若い娘の姿に戻っており、首には信仰心を示す小さな金の十字架がかけられていた、とある。Bram Stoker の *Dracula* 以来、ヴァンパイアが十字架を恐れるという定説が世間に流布したが、*The Vampire Chronicles* に登場する美しいヴァンパイアたちの多くが十字架に愛着を抱いており³⁰⁾、Miriam に至っては、十字架を保身のための一種の小道具として用いているのは誠に傑作である。だが、十字架はキリスト教のシンボルになる遙か昔に古代エジプトで生命の象徴であったアंक（Ankh=エジプト十字）を連想させるものであり、Strieber はアंकを「均衡の保たれた自然と均衡の保たれた統治をあらわす Keeper の古代の象徴」³¹⁾と定義していることも忘れるべきではない。更に映画 *The Hunger* で Miriam に扮した Catherine

Deneuve と John に扮した David Bowie が常に首にかけていたアネクは、鞘から抜けば人間の生命を奪う剣となった³²⁾ ことも思い出される。

Miriam が観光客とともに地下納骨堂に入ったまさしくそのとき、フランスの特殊部隊と合流した Paul Ward と部下たちは、ヴァンパイア殺戮用に開発された強力な銃を携えてカタコンブの中を搜索していた。そして秘密集会に出席するために集まっていた Keeper たちは人間の武力を過小評価して Miriam の懸命の警告を全く無視した結果、Ward の一隊によって次々に殺されて行った。だが不思議なことに、Miriam は、仲間や友人を抹殺している怪物のリーダーが所詮は人間の男に過ぎないはずなのに、Keeper と同じ速度で敏捷に動き、彫りの深い美しい顔立ちであるのを目の当たりにして、世界でもっとも強く、最も素晴らしい Keeper の男を見たかのように、激情的な恋に陥った³³⁾。Miriam と同じく古代エジプトに君臨していた誇り高い女性 Keeper の頭が銃弾で吹き飛ばされ、古代の老人の皮膚で装丁された表紙にエジプト十字を記した Book of Names が奪われそうになったとき、Miriam は暗闇の中で Paul と格闘し、彼は、怪力のヴァンパイアが香水の匂いを漂わせていることに驚嘆し³⁴⁾、素晴らしい美人に違いないと直観した。一方 Miriam は、この男が余りにも Keeper たちを憎悪しているので、彼らに愛情に近い感情を抱くほどになっていることを悟った。このように *The Last Vampire* は前作 *The Hunger* とは対照的に冒険活劇的要素が多く見られるので、Sony Pictures Entertainment がこの小説の映画化権を購入した³⁵⁾ のは実にもっともである。

その格闘の後、Paul がさまよい歩いた古代の精巧な地下道は人知を超越した技術を駆使してヴァンパイアたちが築いたものであり、それはリュテス円形闘技場の地下に位置していたと Strieber は述べている。Paul は当時ヴァンパイアが世界の統治者であり、人間が牛を飼育するのと同じように彼らが人間を飼育していたのだと悟り、慄然とした³⁶⁾。そして地下納骨堂で名高い Denfert-Rochereau の真下の洞窟がヴァンパイアに襲われた数知れぬ人間の納骨堂となっていることを彼は初めて知った。この恐ろしくもグロテスクな墓場の先の岩屋の壁には、ネアンデルタール人から溯り類人猿に至るまでの人類の進

化の記録が細密なモザイク画で描かれていた。壁画の始まりの箇所には天使から生まれたかのように美しい若い女の肖像画があり、この女が Eve に相当するのだろうと Paul は思った³⁷⁾、と述べられているが、Keeper 自身が描いたとすれば、その肖像は、Eve ではなく、Adam の最初の妻 Lilith をモデルとしたものであると類推される。Paul は、人類が偶然の出来事や神の意図によって進化したのではなく、別の恐ろしい手によって類人猿が操作された結果、誕生したと悟ったとき、人類の創造者が実はヴァンパイアであることが明白となったので、何故ヴァンパイアが人間を無力な二本脚の家畜のまま放置しておかなかったのかと戦慄した³⁸⁾、とある。だが、Paul のようなタイプの男は、善良で誠実であっても、高度に哲学的・宗教的な真理の追求に頭を悩ませる習慣はないためか、自分の行為の道徳性について疑念を抱くことなどせず、引き続きヴァンパイア殺しに没頭しながら進んで行った。彼は Miriam の投げたナイフで肩に重傷を負ったが、彼の有能な部下 Becky とフランス人の特殊部隊の大佐は倒れ伏しているヴァンパイア全員の頭部を銃弾で粉碎した³⁹⁾。

数日間イギリスの Berkshire へ行っていたため連絡が取れなかった Sarah は、Miriam の危機を知るとコンコルドでパリへ向かい、敬愛する親友を New York へ無事に連れ帰った。Sarah は独立心と自尊心の強い知的な女性ではあるが、Miriam が人類にとっていかに重要な意義を持つ存在であるか熟知しているので、彼女に奉仕することに甘美で畏敬の念に満ちた喜びを覚えている⁴⁰⁾、と Strieber は述べており、絶滅させるべき忌まわしい怪物として Keeper を殺し続けることを生き甲斐とする Paul Ward と上記のような Sarah Roberts の見解がまさしく対照的であることに注目すべきである。そして Strieber は、Miriam が西洋文明の諸相を創造し、それらを育んできたことの実例として、旧約聖書の「ソロモンの雅歌」の中でソロモン王が愛を謳ったシュラムの女、ダンテの叙事詩『神曲』の中で永遠の淑女とされたベアトリーチェ、セルバンテス作『ドン・キホーテ』の中で理想の姫君として描かれているドルシネアなどのモデルが Miriam であると述べており⁴¹⁾、Miriam が古今の芸術家に靈感を与え続けてきた存在であることが示唆されている。Sarah は短期間とは

いえ、余りにも恐ろしい拷問を経験した後に Miriam の愛のおかげで新しい生を受けたことに深く感謝したが、生きるためには人間を殺さねばならない宿命を背負わされたことに懊悩し、病んで悲嘆に暮れた魂をもった頹廢的な放蕩者となったと自嘲的に認めていた⁴²⁾。Sarah は Miriam が自己中心主義的な発想から恋人たちに贈り物を与えた行為は邪悪であるという観点に基づいて道徳的立場から Miriam を非難できると信じていたときもあったが、Miriam とともに眠り、彼女の優雅な生活を共有し、彼女の経営するナイトクラブへ行き、ヴィオラ・ダ・ガンバ（現代のチェロと同様に足で支えて演奏する六弦の楽器）と一緒に演奏し、Keeper の目を通して全く新しい視点から世界を眺めているうちに、Miriam を批判するだけの強さを失った⁴³⁾と描写されているが、これは、決して Sarah が精神的に墮落したからではないと推察される。我々は、捕食動物が存在するために自然界の均衡が保たれていることを認めねばならないが、Strieber は、人口過剰が地球を破滅させつつある原因のひとつは Keeper の数が減り、自然界における使命を達成できなくなったことによるという実に興味深い説を展開する⁴⁴⁾。彼は *The Last Vampire* の本文の前に「私は地球の公正さの一部をなしている。」という Miriam の言葉を引用しており、もし地球上に人間よりも優れた知能を持つ Keeper のような捕食動物が本当に存在するとすれば、Keeperこそ自然界の均衡を維持するために、人間という生物の生殺与奪の権利を有することとなる。Sarah は憎悪の対象とするのが当然の Miriam を崇敬し、熱愛していたので、Keeper として奇跡的な回復力を持つ Miriam の頭にまだ髪が生えてこないことを知らされたとき、人間たちに焼き殺されそうになった Miriam の耐え忍んだ苦悶を想像して悲嘆に暮れた⁴⁵⁾。

さて、帰国して CIA 本部の所在する Virginia 州 Langley に戻った Paul Ward が驚愕したことには、ヴァンパイア掃討作戦とそれに伴う情報部員の死亡を重要視した大統領が人権擁護委員会を発足させ、この委員会はヴァンパイアを「血液の異なる人々」(differently blooded persons 略称 DBP) と定義したのであった⁴⁶⁾。人権擁護委員会は、ヴァンパイアと呼ばれる者たちが高度に知的であるなら、彼らを人間もしくは人間に似た生きものとみなし、全ての法

的保護を受けさせるべきであると判断した。そして「彼らが生きて行くための自然条件として人肉を食する必要があるなら、いかなる捕食動物も、その餌食となる動物を虐殺したとはみなせないのと同じように、彼らを殺人者もしくはテロリストとは認められない。...更に彼らを絶滅危惧種の生物と認め、彼らの生息環境の保護と彼らを殺す数を限定する基準を定めるべきである」⁴⁷⁾と宣言したのだった。ヴァンパイアが絶滅危惧種の生物と規定されたことは荒唐無稽に思えるかも知れないが、もし現実には地球上にこのような生物が存在するとすれば、人間と彼らとの共存をはかるために、血液の異なる持つ種族も自然界の一部であると公に認められたことは、ある意味で道理に適っているように感じられる。Paul Ward は彼が殺した DBP 一人一人に対して殺人罪で告発されることになる上司から言い渡されたとき、驚天動地の思いであったに相違ないが、Keeper 側から見れば、アメリカ政府の決定は物質文明を急速に進歩させたために驕り高ぶっている人類が下した最初のまともな判断と言えるものだったと推測される。Paul は自分が長年忠誠を誓ってきた CIA という組織のはみ出し者となったことを思い知り、独力で可能な限り多くのヴァンパイアを殺す決意を固め、1998年に女性犯罪リポーター Ellen Wundering がヴァンパイアに関する取材中に行方不明になるという事件が起こった New York へ向かった⁴⁸⁾。その途中で彼は、かつて学んだ St. John's College の図書館へ行き、誰でも使用できるコンピュータを用いて部下の Becky に指示を与える電子メールを送信したと述べられており、Strieber が自分自身の母校である St. John's College に対して抱いている愛着を読み取ることができる。Strieber は、完全に門戸が開放されている図書館が存在することからも明らかなように、この大学がアメリカ最高の大学ではないかと述べている⁴⁹⁾。

現在 New York の Miriam の家に Sarah とともに住んでいる Leonore Patton は名高い Patton 将軍のまたいとこの娘であるが、高級車や小型ヨットを持つほど裕福であるにもかかわらず、精神的には孤独であった。だが Leo (Leonore) は Miriam の経営する高級ナイトクラブ The Veils で Miriam に誘われて以来、彼女の瀟洒な家に住むようになった⁵⁰⁾。Sarah としては、Miriam と

の生活の中にこの一見軽薄な小娘が割り込んで来ることを快く思わなかったが、Leo を可愛がっている Miriam は、近い将来に彼女をヴァンパイアに転生させる予定であった⁵¹⁾。だが Keeper の種族が文字通り絶滅の危機に瀕している過酷な事実直面した以上、彼女は一刻も早く、自分の味方を増やさねばならないと直感して、直ちに行動に着手せざるをえなかったと推察できる。Miriam は、飢餓感にさいなまれている Sarah が 60 歳くらいの浮浪者の女の頸動脈に放血刀（動脈を切開する瀉血用のランセット）の曲がった先端を差し込んで血管を切り裂いて血を吸い込む様子を、若い Leo に観察するよう命じた⁵²⁾。最初は好奇心に駆られて眺めていた Leo は、この凄惨な光景を目の当たりにして驚愕したが、Miriam は更に、自分がその女の全ての体液を吸い取り、皮膚が乾いてひび割れた状態になって行く過程を直視するよう Leo に厳命し、遺骸の焼却方法について彼女に教えてやるよう Sarah に指示した⁵³⁾。Leo は恐ろしい衝撃から素早く立ち直り、自らが自然そのものである Miriam Blaylock から血を授けられることは人生最高の特権であるという信念を取り戻した⁵⁴⁾。Miriam は「汝には今、汝の永遠の Keeper の血が与えられるであろう。汝は私の一部となり、私は汝の一部となるだろう。... 汝には永遠の命が与えられるであろう。... 汝は断つことのできない絆で私に結び付けられるであろう。疑問を抱くことなく、汝には、あらゆる方法で、私に仕えることが求められるであろう。いついつまでも。」⁵⁵⁾と Leo に告げた。Sarah は、Leo の顔に助けを求める表情が浮かんでいるのを見て、血液の注入を止めさせようとした。ここで注目すべきなのは、Miriam が Leo に向かって「お前がここから出て行くのは自由なのだよ。」⁵⁶⁾と二度言い、Leo に決して輸血を強制してはいないという事実であり、Sarah を変身させたときのように、本人が何も知らぬうちに、この極めて危険な実験を行なってはいないという点である。ヴァンパイアが生き延びるために必要な殺人行為の実態を明確に示し、あくまでも本人の自由意思で転生するか否かを決断するよう Miriam が促しているのは、Sarah の場合のような悲劇を繰り返さないためであろう。そして輸血後、高熱を発している Leo の心に安らぎをもたらすために Miriam は子守歌を歌ってやった。

二日間ひどく悪い気分さいなまれながら眠り続けた後に目覚めた Leo は、以前よりも美しい容姿になり、可愛い娘から際だった美人に変身していた⁵⁷⁾。Sarah はヴァンパイアへの変身が人間にとっていかに深刻な事態を引き起こすか、まだ自覚してはいない Leo に彼女が背負うこととなる宿命について怒りをこめて語ったが、生来の Keeper である Miriam には人間の生命を奪う権利があると認めていた⁵⁸⁾。パリでの大災厄がもたらした精神的動揺から立ち直り、Leo にも超人的な能力を与えることで多少の自信を取り戻した Miriam は、気分転換のために、その日の午後、ごく親しい友人たちを招いてヴィオラ・ダ・ガンバの演奏会を行なった。彼女は、かつて母に恋していたルシェール・ド・マルキーが作曲した曲を彼自身が使っていた楽器を用いて Sarah とともに演奏して、New York の上流階級の人々から成る聴衆を感嘆させた⁵⁹⁾。

Miriam は鋭い直感力によって、パリで大勢の仲間を殺戮し、彼女も殺そうとした例の男が Ellen Wundering の行方を尋ねるために、近々 The Veils に現われるだろうと察知していた。Keeper の虐殺がアメリカでも展開されているとすれば、最悪の場合には自分が地球上で最後の Keeper かも知れないが、Miriam は、宿敵を迎え討ち、必ず復讐を遂げる決意を固めていた⁶⁰⁾。我々は、たとえ滅ぼされることになるとしても、世界の統治者として君臨した一族の誇りを貫こうとする彼女の決意の悲壮さを窺い知ることができる。Miriam がその男の姿をバーで見つけたとき、優雅で精確で油断のない身のこなしに魅了され、彼に対して激しい欲望を覚えたが、彼女はヴァンパイアに転換させたばかりの Leo の最初の食糧としてこの男を与え、彼に屈辱的な死を味わわせるつもりだった⁶¹⁾。

パリの地下納骨堂の中で Miriam と対峙しながらも暗闇だったために彼女の顔が見えなかった Paul は、初めて Miriam の顔を見たとき、二十歳を過ぎていたとは思えぬほど若々しく、天使のように美しい顔に率直さと自信を表わした女性オーナーの強力な魅力に強く引きつけられた⁶²⁾。このナイトクラブは、名高いマジシャン Doug Henning が照明と鏡を駆使して通路を設計し、店内を移動する客は、不可思議な方法で仕切りを通り抜けて次の部屋に入り込むた

めに The Veils と呼ばれており⁶³⁾、Miriam は Paul の手をとってクラブの奥のダンスホールへ案内した。そこでは大音量の電子音楽のビートに合わせて全裸の男女が古代の神々のように踊り狂っており、Paul は酒に混ぜられていた麻薬のせいで興奮状態に陥り、周囲の人々と同じように激しく踊り出した⁶⁴⁾。彼は天国と地獄が融合したかのような雰囲気の中で恍惚となっていたが、音楽が止むと、自分の衣服が盗まれていることに気づいた。実は Miriam は、Paul の武器を取り上げるとともに、敵とはいえ美しい彼に立派な身なりをさせたいと思い、いつの日か復活させたいと願っている John の服を着せたかったのだ⁶⁵⁾。

罪と快楽が見事に正当化され、荘厳な歓喜さえも引き起こす妖しい部屋部屋を Leo に導かれて通過した後、Paul は Miriam の部屋にやって来た。彼は、ベッドに腰かけながら「牧神の午後への変奏曲」のフルート演奏をしている彼女の、清らかさと妖艶さが渾然一体となった美しさに圧倒された⁶⁶⁾。Miriam は、この男にどのような復讐をするか考えていたのだが、同時に、これほど美しく逞しい男であれば、自分が深く愛していた Keeper の夫と同じように荒々しい歓びを与えてくれるだろうと期待していた⁶⁷⁾、と述べられており、Miriam の複雑な性格が明らかにされている。一方 Paul は天使の甘美な炎で身を焼かれているような思いであった⁶⁸⁾。Miriam は至福を感じたが、信じがたいことに、人間の男との関わりであるにもかかわらず、彼の子を身ごもったことを認識した。彼女は、これが自分にとって最後の出産の機会であると知っていたので、一体どんな子が生まれてくるのか、或いは死産となるのか見当もつかずに泣いていた⁶⁹⁾。Paul という男の正体に対して疑問を抱き続けてきた読者にとって、物語のこのような展開は予想外に感じられるかも知れない。「あなたを敬愛している」⁷⁰⁾と Miriam から告げられた Paul は、これほど素晴らしい女が、決して若くはなく、CIA から追放の身となっている自分を必要としてくれたことに感激して、泣きたい衝動に駆られた。愛し合う二人の様子を見つめていた Sarah と Leo は思いがけない成り行きに狼狽したが、Miriam の指示通りに、彼女の呼ぶところの「恋人」を家に連れ帰ることになった。

PaulはMiriamのSutton Placeの屋敷の図書室で多くの稀購本を見つけ、Verdi自身が書いた*Rigoletto*の楽譜に感動した。Paulがオペラに非常に関心があると知ると、MiriamはSarahの伴奏で*Rigoletto*の中の“Caro Nome”（『慕わしき御名』）をVerdi直筆の楽譜を見ながら歌い、最後のくだりではPaulを抱き締めて踊り回った⁷¹⁾。世界の支配者の一族としての威厳を保ち、本来、冷静沈着で極めて慎重な性格のMiriamが非情なヴァンパイア・ハンターの男との恋に溺れれば溺れるほど、最終的には恐ろしい破局が待ち構えているに違いないという不吉な予感を読者は覚えるはずである。MiriamがPaulに見せた貴重なコレクションの中にはJohn Keatsの*Lamia*とTennysonの*Tithonus*の作者直筆の原稿があった⁷²⁾と述べられており、当然ながら*The Hunger*の冒頭に引用されていた二つの詩が思い起こされる。Paulは、黄金の妖精やサチュロスや海に棲む生きものの姿が彫り込まれた巨大な黒いオニキスの浴槽にMiriamとともに入浴し、Sarahに体を洗ってもらい、天国にいるような気持ちであった。彼は自分の生涯の倦怠と失望と余りにも多くの罪が消え去り、天使たちの援助によって清められつつあるのだと感じていた。

Miriamから妊娠したと思うと聞かされたSarahが驚愕したことは言うまでもない。科学者で医師であるSarahは20年間にわたって彼女の体をあらゆる面から研究し続けており、Miriamが彼女の研究のために1億ドル出資してくれたために、地下の実験室は科学の驚異と呼べるものになっていた。従ってSarahは、人間の男を相手にしてMiriamが妊娠するはずはなく、妊娠を願っている悲劇的な幻想であり、彼女がKeeperとして体に保有していた4個の卵子のうちの最後のものが失われてしまったと認識していた。SarahはMiriamに憎悪を感じることもあったが、殆ど場合は愛していたので、妊娠検査の結果、我が子を持つ最後の機会を失ったと知ったときの女の悲嘆をいかに慰めるべきか思い悩んだ⁷³⁾。また彼女は、Miriamの愛情を独占する兆候を見せている無知な娘Leoに対して嫌悪と嫉妬を覚えてきたのだが、軽率な判断を悔やみながらも飢餓感にさいなまれているLeoに同情し始めていた。ヴァンパイアに転生したとはいえ、人殺しをするよりは自殺する方が良いと嘆いている

Leoの心境は、かつてのSarahと全く同じだったからである⁷⁴。常識的な読者にとって*The Last Vampire*の登場人物の中で最も感情移入しやすいのはSarahであろうと類推される。彼女は、何百人ものKeeperを殺戮し、Miriamの正体を知れば直ちに彼女を殺すに相違ない怪物Paul Wardの血で飢えを満たすのがLeoにとって最善の道であると説き、自分がこの男の血管に切り込みを入れてやるので、彼の血を吸うよう説いた⁷⁵。

ぐっすり眠り込んでいるPaulのそばで幸福そうな表情を浮かべているMiriamをSarahは哀れみの目で見つめた。しかしSarahはMiriamの頭髮がわずかの間に増えていることに注目していた。Miriam自身、自分たちの一族は遙か昔に宇宙のどこかの星から地球にやって来たということだけはSarahに告げたことがあったので、Keeperのように再生組織が著しく進化した生きものは地球上の生命体ではなく、種を進化させることのような測り知れぬ使命を帯びて地球以外の星から訪れたのではないかとSarahは感じた⁷⁶、と述べられており、これはSF小説家であるとともに自らがUFOに遭遇した体験記を書いたWhitley Strieber自身の「ヴァンパイアの起源はエイリアンであった」という説として解釈することができる。Sarahは、自分からMiriamを奪いMiriam自身の宿敵でもある男を殺したいと欲しており、その願望は、極めて恐ろしいけれども、何故か極めて神聖でもある「種」の境界を越えた愛に基づくものであった。Miriamへの激しい怒りと呪われた宿命から逃れるための奮闘にもかかわらず、Sarahには、自分が自由も死も何もかも超越して、最終的には愛するMiri (Miriam)を選択するであろうと分かっていた⁷⁷。彼女は、先端が曲がっているランセットを鞘から抜き、外科医の指の繊細な接触でPaulの頸動脈を探し出し、幾度となく実践してきた機敏さで血管を切り裂き、血液が吹き出すと、Leoの顔を傷口に押し当てた。Leoは驚くほど上手に行動し、強烈なエネルギーを吸い込み、新たな生命感で満たされた。Paulの体は一瞬がっくりとくずおれたが、Sarahの予想に反して、Leoに血を吸われても命を失わず、苦痛と驚愕の叫びを上げ、首からLeoを引き離そうとした。PaulからLeoを引きはがしたMiriamが、彼は自分と同じ種族の出身なのだ⁷⁸、と悲

鳴を上げたとき、PaulはLeoとMiriamの両者と闘う決意を固め、彼を救ってくれたMiriamを容赦なく絞め殺そうとした。SarahはマグナムでPaulを倒したが、Miriamは医師であるSarahに彼の命を助けてくれるよう懇願し、もし助けてくれなければ自殺するという意思表示としてPaulを撃った銃を自分の口に突っ込んだ⁷⁹⁾。たとえ彼女が引き金を引いたとしても死亡することはあり得ないのだが、回復不能ほどの損傷を受けるだろうと判断したSarahはPaulを診察し、すでに血液の2/3以上を失っているので死ぬだろうと告げた⁸⁰⁾。これを聞いたMiriamは爆発する火山のように激怒と悲嘆で荒れ狂ったのちに正気を取り戻し、人類を支配する者としての誇りを目に閃かせて「お前には彼の命を奪う権利はなかった！」⁸¹⁾とSarahに告げた。何としてもPaulを救うよう命じられたSarahは、優れた外科医としての技量を発揮して、極めて困難な手術を見事に成功させた。彼を射殺するつもりだったことを謝罪するSarah⁸²⁾に対して、Miriamは次のような事実を告げた。すなわちBooks of Namesによれば、Keeperたちは、人間の血液を食糧としなければ生存できない宿命から逃れるために、今から千年前に彼らと人間との交配を試みたが失敗し、Keeperと同じ敏捷さと体力を持つ人間を造り出しただけに終わり、この人間の一族全てを絶滅させたが、一人だけ生き残りがいたことが40年前に発覚したので抹殺した、とのことであるので、この人間の息子がPaulであろうとMiriamは推察していた⁸³⁾。作者Strieberは、東欧伝説において、人間とヴァンパイアの混血の生きもの「ダムピール」(Dhampir)がヴァンパイア・ハンターとして超人的な才能を発揮するとされている⁸⁴⁾ことをふまえながら、「ヴァンパイアの先祖はエイリアンであった」という彼の独創的な見解を、より発展させたと見ることができる。

理知的なSarahは、たとえMiriamの妊娠が事実だとしても、ヴァンパイアを徹底的に憎んでいるPaulは依然として致命的な危険をもたらす存在であると警告したが、Miriamは「Paulの大きな心—彼が本来備えている暖かい感情」に訴えかける機会が欲しいと切望していた。だが彼女自身、Paulというダムピールが自分に真の愛を捧げるようになる可能性がいかに僅かなものであ

るかを当然熟知していたはずである。人類の上に君臨してきた支配者の一族の最後の者である Miriam は、亡き夫の肖像画を見つめて「私は自分の幸福を別の世界に残してきた... 私は時間の中で道に迷っている... しかし子どもができたので希望がある。」⁸⁵⁾と述べた。これを聞いた Sarah は、ヴァンパイアに転身した自分は常に孤独だが、人間のパートナーとともに暮らしていても Miriam も心の底では常に孤独であり、優雅で頹廢的な生活の中に潜む絶望から解放される唯一の希望が彼女の子どものだと悟った。従って、その赤ん坊が幻影に過ぎないと知れば、Miriam の心は完全に打ちのめされてしまうだろうと Sarah は悲しんだ⁸⁶⁾、と述べられており、思慮深く、善良で、思いやりに富んだ Sarah が、いかに深く Miriam を愛しているかが窺われる。

一方、新たな飢餓感に襲われた Leo は家を抜け出して浮浪者と思える若者を襲ったが、実は、彼は知り合いのパフォーマンズ・アーティストであった⁸⁷⁾。Leo は追手から逃れるためにランセットが突き刺さったままの死体を East River に投げ込んで帰宅したので Miriam を激怒させたが、人間の支配者たる自分に逆らって外出し、独力で狩りをした勇気は彼女を感服させた。Miriam は、死ぬことができない転換者の末路がどのようなものであるか棺の中の John の姿を Leo に見せた後で、本来は優れた知性に恵まれているはずの Leo を生まれてくる息子の家庭教師にするつもりだと告げた⁸⁸⁾。Miriam は科学者・医師としての Sarah の技量と彼女の誠実な人格を評価してはいたが、ヴァンパイアに転換した後に、人間であった過去の追憶にいつまでも悩まされることなく前進することを第一義として自由奔放に振る舞う Leo の方に強く心を惹かれたのだと推察される。

意識が戻った Paul は、女ヴァンパイアから“husband”（夫）と呼びかけられて当惑し、彼女から、自分の腹部で彼の息子が健やかに育っていると聞かされたときには軽蔑の表情をあらわにした⁸⁹⁾。だが、Leo から自分が人間ではなく半ば Keeper であること、Keeper たちは生存のために人間の血液を必要としているが、人間への憎悪の感情など抱いていないことを理路整然と説明されて、驚愕した⁹⁰⁾。更に彼は Sarah Roberts 医師から自分の血液について詳細な

説明を受け、自分がヴァンパイアの血を引いているという事実直面せねばならなかった。彼は、自分が人間の女性との間に子をもうけることはできないが、Miriamを受胎させられたのだと聞かされて、銃を口に突っ込んで自殺したいと思い、死を願ったが、ヴァンパイアの血が流れているために人間とは比較にならぬ速度で健康を回復して行った。Paulは自己嫌悪に陥りながらも、MiriamもSarahもLeoも抹殺するための綿密な計画を立てた⁹¹⁾、と述べられており、Miriamの期待とは正反対に、暴力的な人生を送ってきたPaulという男が自分の出生の秘密を知ったときに、やり場のない激しい怒りを覚え、これまで以上にヴァンパイアに対して破壊的欲望を覚えたのだと解釈することができる。

妊娠したために、これまでの冷徹さと警戒心を放棄してしまったように見えるMiriamの態度には理解しがたい面があるし、Keeperとしての威厳と誇りを盲目的な恋のために擲った彼女から磁氣的魅力を感じ取ることはできないであろう。精神的に全く信用の置けない相手の子を宿したにもかかわらず歓喜に溢れるMiriamは常軌を逸しているが、超絶的な直感力を持つ彼女は、もはや身の破滅が避けがたいものとなったと予感していたはずである。The Last Vampireを注意深く読めば、妊娠したことが確実にってから Miriamが『慕わしき御名』を歌っていたのは生まれてくる自分の息子に対してであり、自分の正体を知るやいなや殺そうとしたPaulに対してではないことが明らかである。だが、遙か昔、Keeperの夫とともに暮らしていた頃ですら子宝には恵まれなかったのに、遂に我が子を得ようとしている至福の境地にいるMiriamは、自分の女性としての圧倒的な魅力で新しい夫を征服することによって、自分を愛するようにし向ける自信を持っていた⁹²⁾。

MiriamはPaulに自分たちKeeper一族の観点から道義的に考えることを学んでほしいと願っていたので、彼から、CIA自体が彼らを殺人者ではなく捕食性の生物と解釈し、彼らには人間を殺す権利があり、人間には自分たちの身を守る権利があるという見解を基盤としていると聞かされて大いに満足したが、Paul自身は正反対の主義であると認識してはいなかった⁹³⁾。SarahはMir-

iamに命じられてPaulをベッドに拘束していた手枷と足枷を外したが、一見無害に見えるPaulの心の底を見抜き、警戒心を保ち続けていた。Sarahは20年以上の間、Miriamに友情と愛と忠誠を捧げながらも冷静に見守ってきたので、Miriamが我が身と我が子の生命を危険に晒すような愚行を重ねている原因は、不死の宿命を持つ彼女の血族の者たちが潜在意識の中で自滅を望んでいたと推察されるのと同様に、彼女自身も意識の深層において、他者によって滅ぼされたいという願望を抱いているからではないかと推察した⁹⁴⁾。そしてKeeperを愛して悩み続けてきた以上、Sarah自身もまた、自らの新しい人生を破壊する者たちの到来を心のどこかで期待していたとも言えるであろう。

超音波診断で胎児の姿を観察する日が訪れ、Paulも含めた全員がスクリーンの映像に見入った。胎児の血液の成分の90%がKeeperのものであるが、完全に人間の口と臓器を備えており、ほぼ永遠と言えるほどの生命に恵まれるだろうとSarahが説明した。捕食者となる兆候はなく、人間の胎芽に他ならないと彼女が明言すると、Paulは非常に強い関心を示した⁹⁵⁾。この場面の描写から、Paulは胎児が捕食者であれば容赦なく抹殺するつもりであったと推測される。一方Miriamは、Paulを彼を愛したいと切望してはいたが、彼女の胎児を脅かすような場合には、母親としての彼女がなすべきことをせねばならないだろう⁹⁶⁾、と記されており、彼女にとって最も大切なものは生まれて来る我が子—それが捕食者であれ、食習慣が人間と同じ生きものであれ—であり、その生命を奪おうとする者はPaulといえども、殺さねばならないと認識していることが明らかである。

科学者であるSarahは超自然現象を信じてはいなかったが、まだ見るという行為ができるはずのない、まだ形をなしていない小さな目が皆を見ているかのように感じられたときは奇跡のように思われた⁹⁷⁾。Sarahは、あり得ない現象ではあるが、黒い目とかすかな微笑と整いかけた柔らかな顔が克明に認識できる写真をMiriamに贈った。彼女は自分の息子が偉大なKeeperであるだけでなく、捕食者として人間の血を糧として生きる呪いから解放された存在になるのだと分かったと、感極まって涙を流した⁹⁸⁾。彼女は自分がその写真を宝物と

思うように Paul にも思ってもらいたかった。このとき彼も感嘆したような声を上げたのだが、Miriam の楽観的な予想とは異なり、実は彼にとって「腹の中で怪物が健やかに育っていることに、にんまり笑っている」⁹⁹⁾ 生きものを見るのは耐え難いことであった。従って彼は Miriam と二人だけになったときに即座に襲いかかったと述べられているが、Miriam が宿しているのは彼自身の子であることが間違いない以上、忌まわしい怪物は Paul の方ではないかと感じられる。彼は Miriam と格闘しながら、彼女が愛している貴重な楽器ヴィオラ・ダ・ガンバを踏みにじり、彼女の首に歯を突き立て、堅い筋肉を切歯で噛み裂いた¹⁰⁰⁾。Paul がヴァンパイアと同じ攻撃を行なったのは、やはり彼の体に Keeper の血が流れている証拠であろうと思われるが、Miriam は、ふだんは舌の内部の奥深くに隠されている冷たく細い針を Paul の頸動脈に突き刺して血を吸いながら、彼の欲望をかき立てたと述べられており、Strieber が創造したヴァンパイアの女王 Miriam が、とげのある舌で人間の血液を吸うと伝えられる東欧のウピオル (Upior) に似た吸血行為を行っていたと認められる¹⁰¹⁾。そして彼女は Paul の憎悪にもかかわらず、彼を我がものとし、彼を愛し、彼を自分と自分の息子の味方にするためにいかに自分が努力しているかを彼の魂に強く訴えたのであった¹⁰²⁾。彼女は官能的なヴィーナスのような微笑を浮かべて、息子の名前を Paul Ward, Jr. とすべきだと提案した。彼女が Paul の腕の中で敬愛の念をこめて彼を見つめていたので、もともと彼の本性であったのに彼がこれまで抑圧しようとしてきた愛情と優しさが心の中で開花し、彼らの精神が結ばれたことを示していた。二人は互いに離れることはない、と誓い合い、彼は、これこそ結婚の誓いだと感じた¹⁰³⁾。Paul は Miriam を「僕の妻」、Miriam は Paul を「私の夫」と呼び合い、それを聞いた Leo は Miriam が Paul の愛を勝ち得るのに成功したのだと喜んだが、思慮深い Sarah には納得できなかった。だが彼女は二人を居心地よくさせてやるのが自分の義務と感じて、寝室から立ち去った。Paul は、血を失ったためか、Miriam の暴力的な誘惑の素晴らしさのためか、赤ん坊に凝視されたためか分からないが、自分が降伏したことを知り、自分にはこのヴァンパイアを殺せないと確信し

た¹⁰⁴、と述べられており、読者は、MiriamとPaulと彼らの息子が幾多の困難を乗り越えて、何とか幸せな家庭生活を送ることができれば理想的なのだが、と願うはずである。

だが、そのとき、しばらくPaulと離れていた部下のBeckyが、すばやくベッドのそばに忍び寄ってきた¹⁰⁵。ともに危険な仕事に携わるうちに心が惹かれ合ってきたPaulとBeckyの関係は、Strieberの*The Wolfen*に登場するGeorge WilsonとBecky Neffの間柄を、しばしば思い起こさせるものである¹⁰⁶。彼女の姿を見たことでPaulは人間としての自分の意識を取り戻し、Beckyがジェスチャーで伝えたようにヴァンパイアを殺さねばならないと認識した。彼とMiriamを結びつけていたはずの堅い愛の絆が、かくもたやすく断ち切られるのを見た我々は人間という生きものの精神の卑しさに嫌悪感を覚えるかも知れないが、ヴァンパイア・ハンターとして生きてきたPaul Wardにとって所詮Miriamは邪悪な魔女でしかなかった。Beckyはヴァンパイア殺戮用の高性能の銃を構えたが、その武器が標的の近くにあるもの全てを破壊する能力を持つことを知っているMiriamはPaulのそばにより「私たち（自分とPaul）を一緒に撃つがいい...あなたにはPaulを殺せない。」¹⁰⁷と冷静に告げた。Paulは、それでもBeckyに撃つよう命じ、Beckyは彼に愛していると告げ、彼も彼女に愛していると告げた。その瞬間、Paulは自分がBeckyという普通の人間の女性の愛を求めていたのだと知ったが、キスさえしないうちに自分を愛してきた人間の女の手で死ぬことになると悟った¹⁰⁸。しかし彼は何とかMiriamから離れられたので、BeckyがMiriamと対決することになった。愛する胎児を守るためにMiriamは両手で腹部を覆い、血も凍るような凄まじい絶望の悲鳴を上げ、それを聞きつけたSarahとLeoが部屋に飛び込んで来てマグナムを構えた。Beckyが引き金を引いたのと同時にMiriamは彼女の顔に跳びかかり、Beckyが銃口を上に向けたために、部屋の天井に描かれた騙し絵が粉碎され、空を描いた部分の建材の塊が落下して来た。Beckyが落とした銃を手にしたPaulは、Miriamではなく、彼自身の赤ん坊—スクリーンを通して多分彼を見つめていた、形が整いつつある小さな子—に対して発砲

することができなかった。多くの人間やヴァンパイアを殺し続けてきた血まみれの半生を送ってきたものの、Paul には赤ん坊を殺した経験はなく、この殺人だけは犯すことができなかった。

あたかも彼の父親が今そこにおいて、自分の息子が必要とする導きを与えているかのように、彼の心は彼の父親の声で彼に、こう語りかけた。「もし、お前がその子を殺せば、私の生と死、我々の一族の受難全てが無に帰すのだ。」

地球上での数千年間に及ぶ闘い—類人猿の緩慢な進化、人類を交配し、人類を食糧とし、人類の進化を急激に加速させた Keeper たちの宇宙からの到来—その全てが、この瞬間の、母親と赤ん坊に関わる、極めて重要で、答えることができない倫理的な問題につながっていた¹⁰⁹⁾。

Paul が Becky に指示されて彼女に銃を渡したとき、蒼白な顔に涙を浮かべた Sarah が銃を構えて突進し、Becky と Sarah の両者が発砲した。そして埃と瓦礫だらけの部屋の中には Sarah Roberts の血まみれの亡骸が横たわっていた¹¹⁰⁾。一方 Paul の息子を身ごもっている Miriam と Leo は食糧貯蔵室からどこかへ通じているトンネルに姿を消したが「Paul には自分と息子との絆を感じ取ることができた」¹¹¹⁾と述べられている。Becky は、Miriam 以外のヴァンパイアは全て滅ぼされ、彼女が最後の生き残りであったと告げた。Paul は遂に Becky にキスしたときに、素晴らしいとは言え、このごく普通の、完全に人間の種に属する女性の腕の中に、自分の真の幸福を見いだした¹¹²⁾、とあり、これは彼にとって当然の結論であったと解釈できる。やがて誕生する息子に思いを馳せながら、Paul は、その子を育てることができるかという極めて深刻な問いを Becky に投げかけた。このときの Paul と Becky がどこまで深く自分たちや Miriam と Paul の間に生まれる子の将来について考えていたかについて Strieber は全く述べていないが、Becky は Paul と結婚できれば育てられると答えたので、Paul が Becky に結婚してくれと頼むところで *The Last Vampire* の物語は終わる。

Strieber のヴァンパイア小説三部作の完結編に相当する *Lilith's Dream* では、Paul と Becky が Miriam の息子 Ian を彼ら自身の子として育ててきたとされているが、Miriam は既に Paul によって殺されてしまったと述べられている¹¹⁾。この設定自体にはかなり無理があり、Paul が自分の息子の母親であるとともに心の底では愛情を感じていたはずの Miriam を本当に抹殺できるほど非情な人間であるのか、ひとたび人間の血を味わえばヴァンパイアに変身するはずの息子を厳しく監視しながら親として愛することが果たして可能であるのか、更に Becky が Keeper (=ヴァンパイア) の息子である Ian に対して母親の愛情を注ぐことができるのか等々の重要な問題が障害となっていることは否めない。最終的には Ian は全ての Keeper たちの産みの親として生き残っていた Lilith の同類になることなく人間としての人生を歩むことになり、倫理的観点から見れば、三部作の結末として妥当と言えるかも知れないが、畏敬の念を抱かせるほどの威厳と知性を備え、磁気的な魔力で我々を魅了した Miriam の肉体は Paul によって滅ぼされたとしても、彼女の強烈な個性は間違いなく不死性を持ったものであると結論することができる。

【注】

- 1) Whitley Strieber, *The Last Vampire*, p. 27.
- 2) Scott D. Briggs は、*The Hunger* の最後で棺の中で衰弱しつつあったと推定される Sarah を Miriam がヴァンパイアとして復活させるという殆どあり得ないことを作者 Strieber が読者に信じこませようとした点を批判している。Scott D. Briggs in S. T. Joshi (ed.), *op. cit.*, pp. 319.
- 3) Whitley Strieber, *op. cit.*, pp. 192-193.
- 4) *Ibid.*, p. 83.
- 5) *Ibid.*, p. 4., p. 5.
- 6) *Ibid.*, p. 11., p. 16.
- 7) *Ibid.*, pp. 20-21.
- 8) *Ibid.*, p. 35.
- 9) *Ibid.*, p. 45.
- 10) *Ibid.*, p. 50., p. 52.
- 11) *Ibid.*, p. 58.
- 12) *Ibid.*, p. 218., p. 60., p. 48.
- 13) *Ibid.*, pp. 78-79.

- 14) *Ibid.*, pp. 73-74.
- 15) *Ibid.*, p. 84.
- 16) *Ibid.*, p. 108.
- 17) *Ibid.*, pp. 113-114.
- 18) *Ibid.*, p. 116.
- 19) *Ibid.*, p. 117.
- 20) *Ibid.*, pp. 135-136.
- 21) *Ibid.*, p. 138.
- 22) *Ibid.*, p. 136.
- 23) *Ibid.*, p. 138.
- 24) *Ibid.*, p. 138.
- 25) Anne Rice, *Interview with the Vampire : Book I of the Vampire Chronicles* (New York: Ballantine Books Trade Paperbacks, 2014), p. 81.
- 26) Whitley Strieber, *op. cit.*, p. 142.
- 27) *Ibid.*, pp. 144-145.
- 28) *Ibid.*, p. 149.
- 29) Anne Rice の *The Vampire Chronicles* の中でも、ヴァンパイアたちが社会的集団の構成員として、グループの規律を重んじながら行動している場合が多いことを忘れるべきではない。
- 30) Anne Rice の創造した個性的なヴァンパイア Louis は、十字架を見るのが特に好きであると明言し、Bram Stoker の単純な定義がいかに無意味なものであるか冷笑している。 Anne Rice, *op. cit.*, p. 23.
- 31) Whitley Strieber, *op. cit.*, p. 169.
- 32) S. T. Joshi (ed.), *op. cit.*, p. 162.
- 33) Whitley Strieber, *op. cit.*, pp. 164-165.
- 34) *Ibid.*, p. 172.
- 35) Whitley Strieber, *Lilith's Dream : A Tale of the Vampire Life*, Back Flap.
- 36) Whitley Strieber, *The Last Vampire*, pp. 174-175.
- 37) *Ibid.*, p. 183.
- 38) *Ibid.*, p. 183.
- 39) *Ibid.*, p. 187.
- 40) *Ibid.*, p. 196.
- 41) *Ibid.*, p. 197.
- 42) *Ibid.*, p. 192.
- 43) *Ibid.*, p. 196.
- 44) *Ibid.*, p. 190.
- 45) *Ibid.*, p. 206.
- 46) *Ibid.*, p. 210.
- 47) *Ibid.*, p. 211.
- 48) *Ibid.*, pp. 216-217.

- 49) *Ibid.*, pp. 219-220.
- 50) *Ibid.*, p. 265.
- 51) *Ibid.*, p. 227.
- 52) *Ibid.*, p. 228., p. 235.
- 53) *Ibid.*, pp. 237-238.
- 54) *Ibid.*, p. 239.
- 55) *Ibid.*, p. 241.
- 56) *Ibid.*, p. 241.
- 57) *Ibid.*, pp. 245-246.
- 58) *Ibid.*, p. 248.
- 59) *Ibid.*, pp. 249-250.
- 60) *Ibid.*, p. 271.
- 61) *Ibid.*, pp. 272-273.
- 62) *Ibid.*, pp. 273-274.
- 63) *Ibid.*, p. 271.
- 64) *Ibid.*, p. 282.
- 65) *Ibid.*, p. 291.
- 66) *Ibid.*, pp. 302-303.
- 67) *Ibid.*, p. 311.
- 68) *Ibid.*, p. 314.
- 69) *Ibid.*, p. 315.
- 70) *Ibid.*, p. 315.
- 71) *Ibid.*, pp. 322-323.
- 72) *Ibid.*, p. 323.
- 73) *Ibid.*, p. 326.
- 74) *Ibid.*, p. 329.
- 75) *Ibid.*, p. 330.
- 76) *Ibid.*, p. 331.
- 77) *Ibid.*, pp. 332-333.
- 78) *Ibid.*, p. 334.
- 79) *Ibid.*, p. 335.
- 80) *Ibid.*, p. 336.
- 81) *Ibid.*, p. 336.
- 82) *Ibid.*, p. 337.
- 83) *Ibid.*, p. 338.
- 84) Matthew Bunson, *op. cit.*, p. 65., p. 69. ; J. Gordon Melton, *op. cit.*, p. 196.
- 85) Whitley Strieber, *op. cit.*, p. 339.
- 86) *Ibid.*, p. 347.
- 87) *Ibid.*, p. 343.
- 88) *Ibid.*, pp. 355-356.

- 89) *Ibid.*, p. 356.
- 90) *Ibid.*, p. 358.
- 91) *Ibid.*, pp. 360–361.
- 92) *Ibid.*, p. 369.
- 93) *Ibid.*, p. 362.
- 94) *Ibid.*, p. 366.
- 95) *Ibid.*, p. 371.
- 96) *Ibid.*, p. 371.
- 97) *Ibid.*, p. 372.
- 98) *Ibid.*, p. 373.
- 99) *Ibid.*, p. 374.
- 100) *Ibid.*, pp. 374–375.
- 101) Matthew Bunson, *op. cit.*, p. 260.
- 102) Whitley Strieber, *op. cit.*, p. 377.
- 103) *Ibid.*, p. 378.
- 104) *Ibid.*, p. 378.
- 105) *Ibid.*, p. 379.
- 106) Whitley Strieber, *The Wolfen*, pp. 189–190.
- 107) Whitley Strieber, *The Last Vampire*, p. 380.
- 108) *Ibid.*, p. 381.
- 109) *Ibid.*, p. 382.
- 110) *Ibid.*, p. 383.
- 111) *Ibid.*, p. 383.
- 112) *Ibid.*, p. 384.
- 113) Whitley Strieber, *Lilith's Dream : A Tale of the Vampire Life*, p. 16.

結 び

Whitley Strieber の創造したヴァンパイア Miriam Blaylock は現代世界文学史上、最も個性的なヴァンパイアの一人である。彼女の先祖は宇宙のどこかの星から地球を訪れた異星人たちであるが、彼らは太古の昔からこの地球に住み、自分たちが類人猿から進化させた人間を飼育・管理し、人間の血液を食糧としてきた Keeper という種族であった。優秀な頭脳と優れた感性に恵まれた彼らは限りなく神に近い存在で、若さと美しさを保ちつつ、ほぼ永遠に生き続けることができた。彼らは地球上の殆ど全ての生物を創造し、人類の上に君臨しており、人類の歴史と文化を形成する上で、決定的な役割を演じてきた。

Miriam は古代エジプトのファラオの娘として生まれ、彼女の一族はエジプトに大いなる繁栄をもたらした。だがやがて人間が異常に繁殖するようになるにつれて Keeper たちはヴァンパイアとして敵視されて迫害されるようになり、闇の世界に追いやられ、忌まわしい怪物とみなされるに至った。更に人間のテクノロジーの発展に圧倒された Keeper は人間社会に脅威を覚えるようになり、食糧を得るために姿を現わす以外は、人間たちとの接触を忌避するようになって行った。Keeper たちは凋落の一途を辿り、その数も減って行くこととなるが、人間たちの知性に敬意を表するとともに人間たちに愛情を感じていた Miriam は、最愛の夫が自ら命を絶った後、ひとりだけで永遠の生涯を生きて行く恐ろしい孤独に耐え切れず、愛への飢餓感を満たすために、人間のパートナーとともに生きる道を選んだ。Miriam から不老不死の Keeper の血液を注入されることにより、人間は数百年から千年の若さを保って生きることができたが、その代償として Keeper 同様に人間の血液のみを食糧とする宿命を背負い、更にある日突然の老化を覚えた後に急速に老いさらばえ、意識を保ちながら体は徐々に朽ちて行く生ける屍となり、棺に納められることとなった。愛する人間に永遠の生命を授けると約束しながら結局その約束を果たせず次々に破滅させてしまった Miriam は悲嘆と絶望の淵に沈むが、活動的で常に前進することを志す彼女は自分の生涯を充実させることに全力を傾ける。そして老化とは治療可能な疾病であるという説を唱えている優秀な科学者 Sarah Roberts を自分のパートナーに選び、血液を注入した。だがその結果、ヴァンパイアに転生した Sarah は飢餓感を抑制できずに恋人の Tom を殺してしまい、人間としての良心の呵責に耐え切れずに自殺を計った。Sarah に新しい生命を与えて自分のパートナーにしようとした願いを果たすことができなかった Miriam は、これまでの恋人たちと同様、Sarah も棺に納めねばならなかった。彼女は、死すべき運命にありながらも真実の愛のために全てを捧げるだけの精神的な高貴さを持った Sarah のような人間を転生させることに伴う悲劇に深い衝撃を受けたが、並外れた知力を駆使して未完成の Sarah の研究を引継いで、遂に彼女を蘇生させ、パートナーにすることに成功した。

しかし、人間のパートナーとの生活がいずれ悲惨な結末に終わることを懸念した Miriam は、Keeper 一族の理想的な男性との間に子をもうけることを熱望し、世界各地で 100 年に一度開催される Keeper たちの秘密集会に出席して、結婚相手を見つけようとした。ところが彼女はアジア地域の Keeper たちが皆殺しにされたことを知って驚愕し、ヨーロッパ地域の一族を救うために、危険を冒して集会場所であるパリの Denfert-Rochereau の地下納骨堂へ向かった。だが Keeper たちは人間の知能も武力も過小評価しており、Miriam の警告を全く聞き入れなかったために、次々に虐殺されて行った。Keeper (ヴァンパイア) 殲滅活動の指揮を執っていたのは CIA の特別捜査官 Paul Ward であったが、不可思議なことに、Miriam は、この憎むべき宿敵に対して、激情的な恋を覚えた。

現在は New York で最高級のナイトクラブを経営している Miriam は、数年前 Sarah が危機感から女性犯罪リポーターを殺害した事件について調査するために、必ず Paul Ward が自分の店を訪れるだろうと予想していた。彼女はこの男をヴァンパイアに転生させたばかりの娘 Leo の最初の餌食にするつもりであったが、Paul を誘惑していたときに自分が彼の子を身ごもったことを知り、彼が Keeper の血を引いているに違いないと直感して、恋人と我が子を得られたことで至福の境地にあった。

Miriam を激しく憎悪したこともあるが自分を蘇らせてくれたことに感謝し、彼女に「種」の境界を越えた献身的な愛情を捧げている思慮深い Sarah は、Paul が致命的な危機をもたらすに相違ないと信じていたので、飢餓感にさいなまれている Leo に彼の血を飲ませる手助けをした。だが Miriam の正体を知った Paul が彼女を絞殺しようとしたので、Sarah はマグナムで Paul を倒したが、彼女が Paul への愛に命をかけていることを知り、Miriam のために瀕死の Paul を救う困難な手術を成功させた。一族の歴史を記した書物を調べた Miriam は、人間の血を糧としなければ生きて行けない忌まわしい運命を征服しようとした Keeper たちが今から千年前に人間との交配を試みたが失敗に終わり、Keeper と同様の優れた体力を持つ人間を生み出したただけであったので、

この人間の一族全てを滅ぼしたが、その唯一の生き残りの息子が Paul であったのだらうと推察した。ヴァンパイアと人間の混血の生きもの「ダムピール」は傑出したヴァンパイア・ハンターになるという伝説通りに Paul は数多くのヴァンパイアを殺してきたのだが、Miriam は Paul が本来備えているはずの人間としての暖かい感情に訴えかけて、自分を愛してくれることを信じたいと願っており、同時に、女性としての自分の圧倒的な魅力で「新しい夫」の心を勝ち得る自信があった。

超音波診断で胎児の姿を観察する日が来たとき、Sarah は生まれてくる子の血液成分の 90% が Keeper のものであるが、完全に人間の口と臓器を備えていると説明し、あり得ないことではあるが、形の整いかけている小さな顔が皆に微笑みかけていた。人間を超越した知性と感性と体力を持ち、しかも人間と同じ食物で長寿を保つことができる理想的な息子が誕生する奇跡に歓喜の涙を流していた Miriam とは正反対に、Paul は腹の中の怪物の成長にほくそえむヴァンパイアを最も残酷な方法で殺すことを考えていた。だが、二人だけになったときに Miriam に襲いかかって格闘しているうちに、Paul は、彼の憎悪にもかかわらず、Miriam が彼を心から愛しており、彼と自分の間に生まれる息子を愛してもらいたいと切望していることを悟り、Miriam を自分の妻とみなすに至った。

しかし、Paul の部下の女性捜査官 Becky が突然姿を現わしたときに、「種」の壁を越え、怒りも憎しみも超越して交わされたはずの神聖な愛の誓いは破られ、再び Paul はダムピールの業を背負ったヴァンパイア・ハンターに戻った。彼は我が子の命を守るために悲嘆の絶叫を上げた Miriam に銃を向けたが、彼女の中にいる彼自身の小さな我が子を撃つことはできなかった。Miriam を撃とうとする Becky と対決した Sarah は命を失ったが、Paul の子を宿した Miriam は Leo とともに脱出した。自分が求めていたのは人間の女性の愛だったという意識に戻った Paul が Becky と結婚する決意を固める所で *The Last Vampire* は終わり、第三作 *Lilith's Dream* では、Miriam を滅ぼした Paul が Becky とともに、Miriam から奪った息子を育て、ヴァンパイアの世界に引き

込まれぬよう腐心し、何とか人間として生きて行かせることに成功する。

我々は、*The Hunger* においては永遠の時を生きる孤独を癒し、愛への飢餓を満たすために人間に不老不死の生命を授けてパートナーにしようとし、*The Last Vampire* においては暖かい愛情に支えられた家族をつくる夢を信じたいと切望した Miriam Blaylock が、これまでのヴァンパイア像とはいかに異なるものであったかに注目すべきであろう。Strieber が彼の作品の中で、ヴァンパイアの視点から人間の歴史を冷徹な目で観察していることは特筆に値する。人間を深く愛しながらもその血を糧としなければ生きることができない宿命に苦悩しつつも、人間からは邪悪の烙印を押されたヴァンパイアとしての生き方を肯定し、強靱な意志の力によってあらゆる障害を克服して逞しく生き続ける Miriam の姿は、21 世紀の読者にとってこの上なくロマンティックな存在である。このような Miriam と恐らく最も近い個性を持っている文学上の人物は Anne Rice が創造したヴァンパイアのヒーロー Lestat であろう。そしてヴァンパイアの生き方に対する罪悪感と自己嫌悪にさいなまれて虚無的になり、Miriam と人間のどちらを愛すべきかについて常に苦悩し続けた誠実で思慮深い Sarah は、Lestat によってヴァンパイアに転生させられた Louis と非常によく似ている。

荘厳なまでの美貌に恵まれ、極めて知的で感受性豊かな、誇り高いヴァンパイア Miriam の三千年にわたる波乱の生涯を描いた *The Hunger* と *The Last Vampire* が現代アメリカ文学の古典であることを強調して、結びの言葉としたい。

Vampire Literature and American Popular Culture :

Special Reference to Miriam Blaylock in Whitley Strieber's *The Hunger*
and *The Last Vampire*

by

Noriko Onoe

Miriam Blaylock is one of the most attractive vampires in the history of American literature. Strieber mentions that her ancestors were aliens who settled on the earth in ancient times. They created almost all of the living things on the earth, and were indispensable to the justice and meaning of the world. They were nearly immortal beings and were at the top of the food chain. They called themselves “the Keepers” who evolved the apes into the human, keeping man as man keeps cattle. Her family members were distinguished human breeders who had friendly sentiments toward people; her family helped them to invent Egyptian civilization. Strieber states that Miriam and her mother Lamia inspired many artists to create great works. For this reason, we must notice that Miriam’s significance to human history was outstanding.

Although the Keepers had been the secret masters of mankind, the innovative progress of human technology threatened them and they are now “just shadows hiding in dens, their numbers slowly declining”¹⁾ due to the falling birthrate and the massacre by the human. They appear in the human world only to hunt, and are called “vampires.” In spite of the tragedy that struck her kind, Miriam, the intellectual vampire of great beauty has gained riches, honor, and power, making the best use of newest technology. In order to assuage her overwhelming loneliness, she has taken human lovers and has given her supernatural qualities to them by blood transfusion. However, all of them have found themselves suddenly and rapidly getting old after several hundred years; all her previous lovers are locked in coffins in her attic, unable to die but continue to live forever in vegetative state.

Miriam’s current companion John Blaylock, who was given this gift of immortality in the 18th century, suddenly starts aging at a rapid rate in the late 20th century. Hoping to help her beloved husband, Miriam makes contact with Sarah Roberts, a brilliant gerontologist whose research work may hold

the secret to a youthful immortality. Meanwhile, driven by his bloodlust and bitter hatred toward Miriam, John kills young Alice, a music student whom Miriam is planning to transform. Eventually Miriam puts John's withering body in a coffin while weeping. It is particularly worth of note that Strieber uses Tennyson's poem *Tithonus* as an epitaph for *The Hunger*; he compares John to Tithonus, and Miriam to the Goddess of Dawn Eos.

After losing John, Miriam decides Sarah to be her new companion. It is true that Sarah is irresistibly fascinated by Miriam but she is transformed into a vampire without her consent. As a result, Sarah kills her loyal boyfriend Tom Haver for his blood. Struggling with an overwhelming sense of sin, she attempts suicide and loses a large amount of blood. Miriam consigns her to the attic crying bitter tears. It is amazingly impressive that Strieber tells as follows: "Before this experience Miriam had never imagined the heights that could be reached by a human being who was groping toward the truth of love."²⁾ We must be deeply moved by the integrity of Sarah who sacrificed her life for true love, refusing to be an immortal being.

Although she is greatly shocked by Sarah's undauntedness, Miriam desires to bring her back to life. After reading Sarah's scientific papers, Miriam succeeds in her attempt to resuscitate Sarah. Miriam lives with faithful Sarah and young Leo in her beautiful house and owns a thriving nightclub in New York. But she really wants her baby in order to continue her species. So she makes up her mind to find an ideal lover of her kind at the conclave in Chiang Mai. But she is astonished to know that all the Keepers in Asia were destroyed by CIA officers led by Paul Ward. She heads to Paris for the purpose of telling the European Keepers that they are imminently threatened with extinction. But the Keepers in the Denfert-Rochereau ossuary ignore her warning and the special forces led by Paul massacre all of them. To her amazement, Miriam herself is attracted to him "as if he were the stron-

gest, finest male Keeper in the weave of the world.”³⁾

Miriam becomes aware that Paul Ward prepares to investigate her nightclub where a crime reporter was killed by Sarah in a panic. Paul falls in love with Miriam at first sight. In contrast, Miriam has mixed feeling of love and hate toward him. It is unbelievable for her that she becomes pregnant because interbreeding is impossible. Therefore, she senses that he must be of her kind and she is as happy as can be.

Sarah, who devotes self-sacrificing love to Miriam, regards Paul as a mortal danger, and tries to feed this vampire hunter to Leo as her first human meal. As Paul attempts to kill Miriam, Sarah shoots him and he is fatally injured. Though Sarah feels relieved, Miriam frantically demands Sarah to save his life. Miriam explains as follows: According to the Book of Names, Keepers tried to “escape from the need to eat human blood. The result wasn’t good. We’d created human beings with the speed and power of Keepers. So we destroyed all the family lines, except one.”⁴⁾ She suggests that Paul is the last survivor’s son. It is widely known that the offspring of a vampire and a human, a dhampir, possesses certain unique powers in combating his vampiric family members. Paul the dhampir has been a prominent vampire hunter, but Miriam wants her chance to try to reach his huge heart; she wants him to be her new husband and is confident that she can win his true love through her feminine attraction.

Examining the fetus, Sarah informs Miriam that her son has normal human organs and 90% Keeper blood. Moreover, it is miraculous that the tiny, unformed eyes of the fetus are staring his parents out of the monitor of the ultrasound machine. Miriam sheds tears of joy, while Paul plans to slaughter this vampire who is delighted with the health of her child in her belly. Nevertheless, in the midst of the grapple with her, Paul is impressed that Miriam loves him from the bottom of her heart and she desires him to love their

son ; Miriam and Paul make the vow of their marriage.

Suddenly, a woman CIA officer who belongs to Paul's team shows herself, and shoots Sarah to death. We may be disappointed to know that Paul turns out to be an obsessive vampire hunter, breaking sacred vows so easily. He tries to murder Miriam, but he cannot kill his own child. Accordingly, Miriam and Leo make good their escape.

It is remarkable that the most part of *The Hunger* and *The Last Vampire* is narrated from the perspective of the vampires. Miriam feeds on blood of the human, but she always has an attachment to the human. We will never forget the agony of Miriam Blaylock who has tried so hard to give the gift of eternal youth to her human lovers. It should be noted that Miriam has a very strong will and she lives positively no matter how hard and painful it is. We must lament Miriam's death which Strieber mentions in his third novel of the vampire series *Lilith's Dream*, but her individualistic character will live in our hearts forever.

【注】

- 1) Whitley Strieber, *The Last Vampire*, p. 2.
- 2) Whitley Strieber, *The Hunger*, p. 356.
- 3) Whitley Strieber, *The Last Vampire*, p. 165.
- 4) *Ibid.*, p. 338.